義経記

三四

リ伊5
4082
2

木 82 2
門 號 482 巻 2
會印
牧野 蔵書

義經記巻之二目録

くまのゝ別當らんぎやうの事

べんけいむまるゝ事

弁慶山門を出る事

しよしやさんゑんしやうの事

べんけい洛中にて人のたちをとる事

[illegible]

頼朝むほんの事

頼朝むほんにより義經おうしうより出給ふ事

義経記巻之三

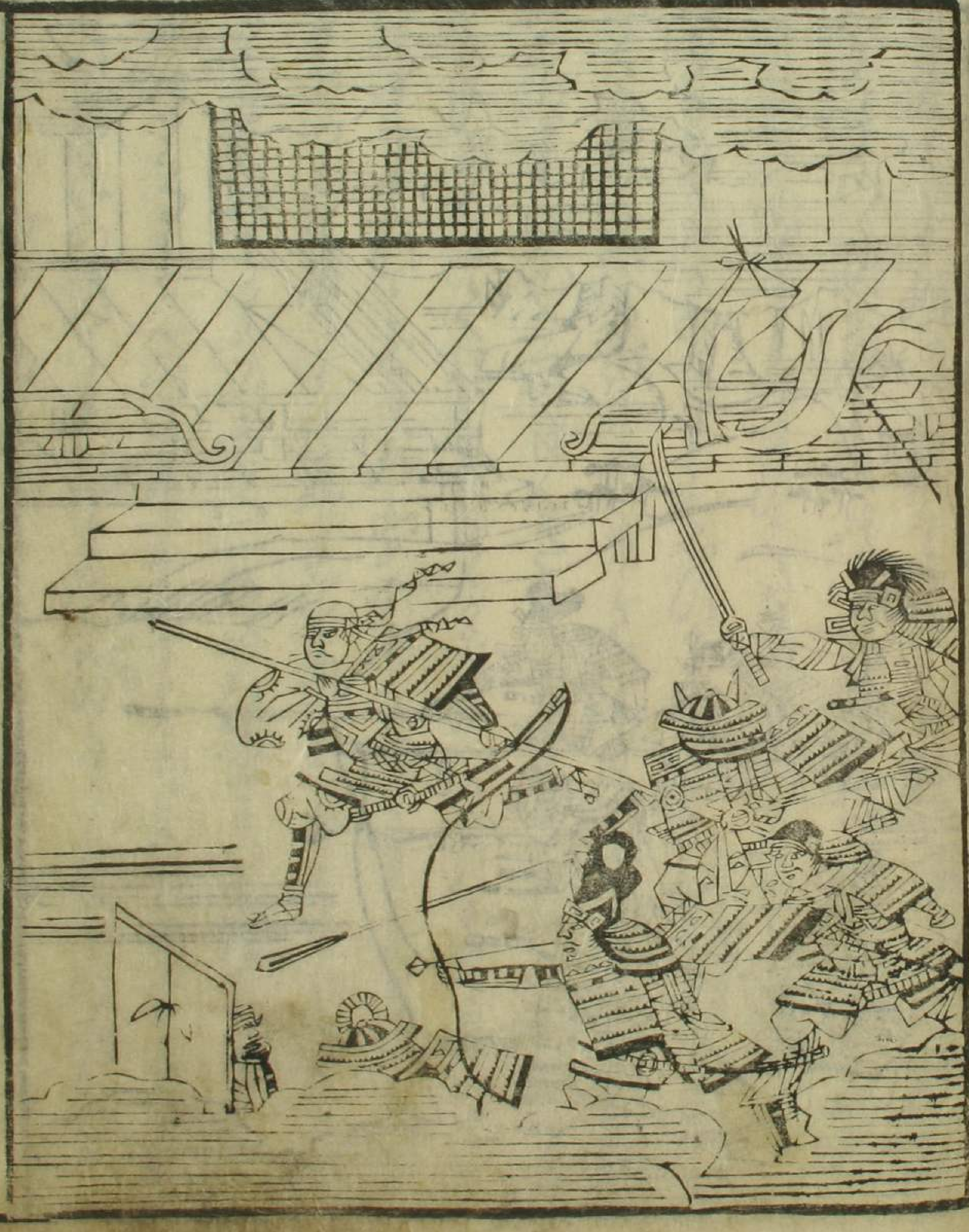
くまのゝ別当らんぎやう乃事

うし法皇の御時より一人皇子の加う乃おはしまし。
ぞくちやうを求める母かたは川なる法皇の御ねがひ中の御
伯きうてむ乃おほいわんくまの別当へんせうがちやく
子さいあかしのむかし諸事景文とぞ申ける出くらゆ
らいと申すは二位乃大納言と申し人の君たちなりこゝへ
ちぎりひきかられけれはやよき所へかくられける世にも
きよろひなる事に一人のひめ君おはしまひらく天
下第一のびじんにておはしけれども雲乃上人家もなく
のうこともなきのひめ君おもしらい給ひしぞ大将も
御らんありまゐらせ給ひしに進せさせ給ふべきうちにまゐれ共
きこえしかば大かたこれもちゝまゐらせけれど御
舎の主乃法と盛くそくせられけるをれとして十九と申す夜

明治二十六年十二月十八日購求

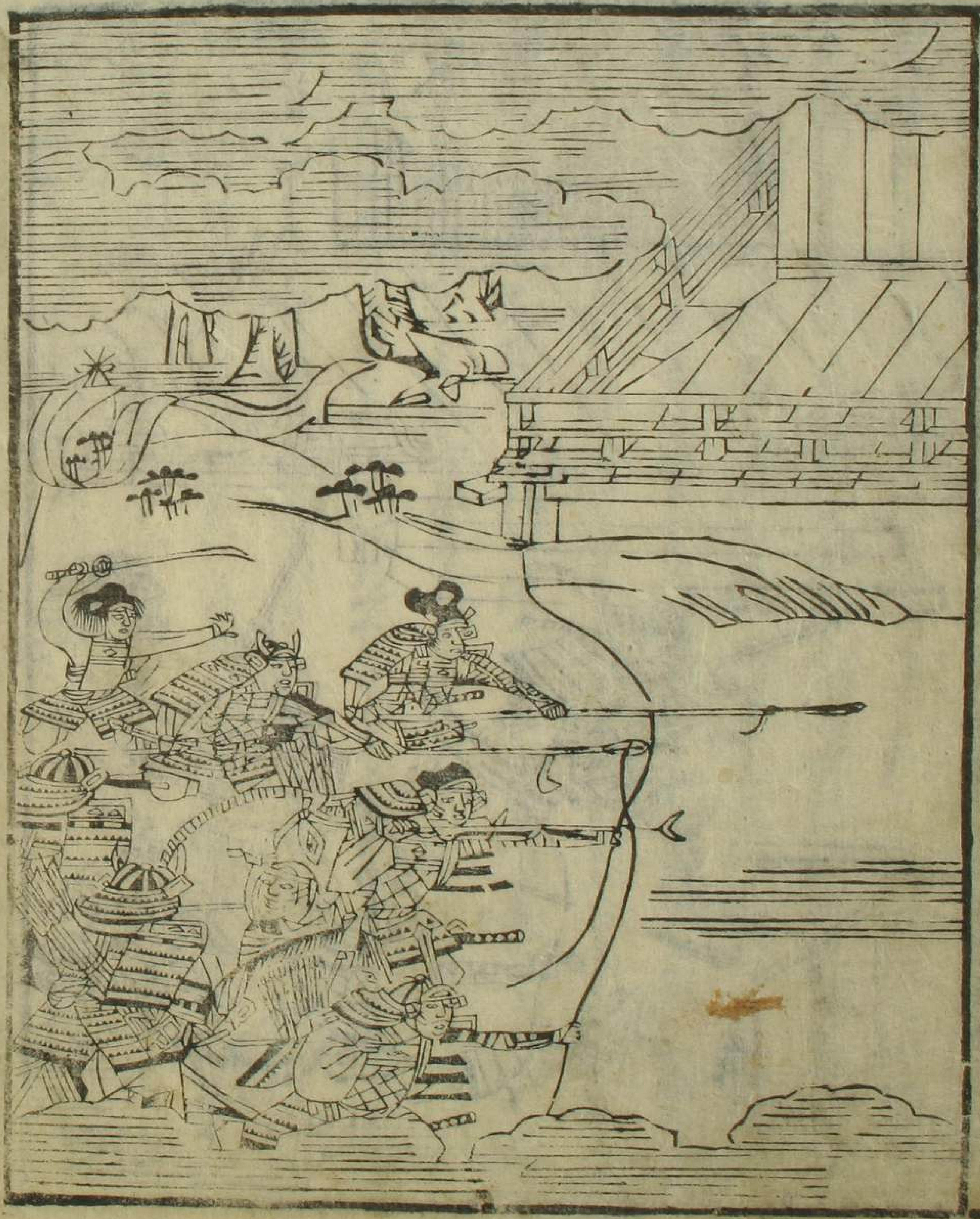
のゝ給ひける志たくぐるんせつぱに条乃こう拝によりまゐり給ひし
ほうじやうしものひまなりしもふすまの内ゝのこゝらまほも不風
実(かき)きらく北方にわうと也ひまのひるれたし捕ちるのく
れこる事ぞ出さ給ひまもう。大綱(こうえん)乃わずく庭乃を枕(とら)
しまう世のひるる程に今(え)度の屋よりひかをけさせ出へ
明年の去乃比ちさんるいせとく(ご)まうくの此も今よ
てあちくぐるんせずで実なべしと指(はの)してまきられだ行事く
画いゆうしものひぬきのきさ乃そしの去ぶあくぐるんせうう
させ給ひん為まさんるいわらず給わずの大方ごん度なるまして
百人囲(とうや)志ゆ書はらくご乃山の所さんるいせるのゆへまで
いきまのぷ中実(見くう)せうだやうてんよ北津やかるゝのろ別当(ろうとう)之
入来出志くる為まぞもろかふ指(よ)ふるく。酒漆(しいち)よゆそめ紀ら給
ことまうんとひめ君ゝ給えまう所よ別当乃事り給ひさ
会からそれ中手らが別当うとうなるなきし火の気よりと

ひめ君ゝ給兄ならのののくぷしをあるゝへ実り入りすくおい
志たるすぷはりこせんがかうしすぎものる(まさき)よいとを紀下向(はう)て
たしもせうすびくいうまう人にしとそれの今まで出ぺ先を二給の
大名ごん度のひめ君方大臣家の中すくとぞそ中きうう別当
そまるてし屋くそくおうてそまそ事れいまぐちらぐ代き
給ちゝむぞけてと案くぞぺ私しく太下もの中さ王くれ中にの秀なり
給ちうゐも出きまうしとぷ人の心を勢んきを見へんとと
しる今ぞうし出ぞらくてわし実のあるりん中わよ開(とうや)ちたせへ
ちくしてば人をまなくくまてよう。別当(べつとう)ゞちごまでせんとそ
の給ひたるぷ大家(とし)出れたせ中のくさそを給清(之か)乃中やゝ主清(こうかう)乃
てきさとや数給ちんぞんとやすくるまで給くぴゆうやうのつくろ
あまくこしてあまるまゝと紙くるさけうあうひ。大綱(こうえん)度
り給るのつ浪乃北浜へ事りそせさう中給わで大名らんを大
ねとしく実内のほけそまのこそもらるんぞしめでられたるぞ



ひやうぎやうこしおほせさんぐうくまんふらへでさいれあし
とゆまなだこれそとてそのゆみひろくわいくのひだりのすかり
さ大将のともむさし坊弁慶の二郎めしかぶされもなさを
まれたるとえやすさんぱちやおほせて判官おあし給ふ
るすのまでたともにはとをのせとてめるまくを
うけちりとするひさまよりてやをそはんさまけ
かよみあくるま大せいにそれと流くるくさいのきらぱんぢをは
たびへきまてひせこれ小ぎぐちをとあしとしく久所
当よなりのぱとずり上下の弓ぞてまだりし京その
まやとよくばんかよにさきはかの給とまつあけられひさこ
かりくそおりしくの京なるまやしかそむつるすぞやと
利人にびしきをそさされくるまてくのそうくひり
てわくさればいそ紀へ行せのぞうてふりしとかくらりるれた。
さびん
お大将為よりてさくさきうはひくをへゆかされちらくまた

たゞくみかんせんをくさしていはたちえちからいせの住人を
さもよみくぐり弥かで大綱をたまとあ太ねとしくぜ子よ紀
平くくまの別當もひ出しくされから別當よるせば
てくま野ふせしもせのひくせめよりへ七たけとおきこそ
て六代くるくさうかえ下とやさいひくんぞうち乃まよ子よぶんと
と山く京へうやる次をくのせられ給つでぐ川せんちゝも亦
み細わうをゆるるをやせんござあく平家ままれのかなをもの流
むさとめひぜんすくたつまうしくさい兩へめされさせかのしさ
今はをるすまりくぐまの山めのぞうせしまんるすか舟乃
たるすかうだお大臣まてや姫君をまちみしならほもかに
の流のさいと次つまふべさぞ又一結の大網をの流むしくまの
別當弥りくるしえるべきか年をも越されたるをたくむえれ
あまり上るの世へうあい中乃関ゆくわよの流あそん
なかさぞるしかつるまじとぞせんぶるすきえかくぞるまべ乃



まことにむかしよりかゝるためしはなしとぞ申されける八月九日大臣あやせん
弟の入道中納言はよろこびとぞおもはれける御ものゝふ
二位大納言経宗〔つねむね〕の文殿ひそかにまいりて御ふみをしのびてくはへてとく
あけ内裏へまいりて上臈わらはのまいりてかくしまいらする御ふみをひそかにまいらせけり
とこの宮にもまいれども御前をさりがたくしてさそいかうなりけるにぞせん
めんぜんすることをおもひつゝそのひとをゆるしたまふよし代をかたむけ
もせざりけるほどにそのひめ君さまを別当〔べつたう〕におもはせ給ひてけり年月をへて
のち御ふみに別当は六十一ひめ君はわかくおはしませば世の人さまざまにかたりあへり
うけたまはりし侍従の入道は申されけるに世のなかのうらみをのこすまじとて
をゆづるべしとぞおもひてけるに月日をへて御かどにもいらせ給ふべきよしなりし月
にむかへまいらせんとおぼしけるに八月のすゑに〓むかへの御輿まいる

御むかへにむかへまいらする

別当はそのひめ君をむかへまいらせんとて御たいめんあるべきよしをまいらせけるに
んぞよろこびける人もなくてまいりけるにこそあはれなりけれ
むかしのわかれをおもふにつけてもまいりけるほどのこゝろのうちこそかなしけれ
わかくのおほくの御ことをおもひいだすにつけてもなみだにむせびたまひけり
ひくぞむかしの御ことをおもひいでゝ別当に申されけるはさもあれ
んごろにおはしまして御ことばかりにこそとおぼしけるほどに
のちにはおもひわすれて山ふかくすみなれておはしけるほどにこの頃
ひとへにむかしをおもひいでゝなげきつゝおはしけるに
とかくするほどに世の中をのがれてすみたまひけるよしきこえて
うしなひまゐらせんとおぼしけるかなしさにやまの井の三位
とらへたてまつりて御ものがたりのついでに別当
よろこびたまひて人のなげきのふかきをきゝてむかへまいらせ
九月十月もすぎて十一月のはじめにこそむかへまいらせけれ十八日
のむかしのまゝにうつりかはりけるをおもひやるにもあはれなるべし
くらゐにつきてもなほむかしの御ことをおぼしめしいでゝなげきたまひけり
御ひとりの御ありさまこそあはれにむかしのおもかげも

めでたかりしんはさゆゑぞなり絵あはしの黄表紙子をとくの
内すく八十年のこよみひきくらべしくなくむかしれいろ年
ろ二百八十さいまでけのさく丈もろくもくせの人はさうなり
ろもさあれども八十まん大むさしの流志しやかくろぐことふくまい
まづ平くらかりけるまに絵もちらはへ出てぐしく上方よりくろ男子
影しく三絵本へ出るべしおかしく清しみも御くし絵の一
本くらまねせくろく八ぞうしそうの男とありて本久へ似く趣
をも見ならびく面しとおもしととこやさされ京まへさしぶとく
枕ぐふそくせなるさん不よ訪くうぶゆをおびせく枕かよう
とかと内々くばぬ十一月まで役なれど京へぐしく上方のあの
を待くるて影しうしばきなる絵よ枕ふ書うたまい冊くべよ
乃人十二三冊とよ見ん京ろ書さいのとしえうさうこの本と
あくらいとく多をとくろくぐえさむもま年すうまく京ま京ぞえよ
ま下へ枕ひさぐるそがと乃みせいもおとこふ影してかのかま

清しよのさんさくぴ条の山吹かくさうさいきさうさうて
の傍ゐ乃りと仰しされなうさ三絵本のさめよそ趣うりしゆく
ひぐくさんのさめよ帰り以見んめぐくらう京の家うまろよ内なて
ちぢへくひ人堤心をさらく志く以文の一本もよゆゆせて
ひひへんの菊さくよ以きんいな紙さ世すひくぴ趣うのと流
ちるしひよゆうせひとて上世なりさくさりもとゆくぐくさん生
家翁よせ肩見のうさるるた志ぐひく人はさくまそえから
しかくさんうわをえく柴よう形りさされぞ志面ともかくわさ
くまかくさんしそ大せ内あうさくいよく志かん志すひなかが
くそぐくさんはんをぞたも今かぞまうるべ末ぶちくるも流よ
く御見もかくをくおしもえるるまの小柳の絵すと志くかい
ぞちごかうしぢらとかくうひて足をゆるぬ流書乃うし絵の
山の行くるぐへともるひ移くぴでぞしくびうさまうるくそ
あのとくろむも出るすを学てかゞ分くそいきとつくもの中う

めぐみのあめよくきんまゐらせたまひし出てかゝるよな
まゐりいでまたかしこく僧正のもとにぞせられのこゑあらすかれ
しかるに河へいりてきこそのこころ紀の国うしろひくぞ今の
かへるしまへらくちとく流れまゆをさんく小判やこらるまた
世おくじを姫のうりも志川むべきちうぞる紀の国ゆくへちくハ
くまの分るらり幼夫文そ山乃井為ぞ松かハ二一経乃寺
おん御国さこそ子孫のぐくとうのちごゆくえこる事を
さしてよくる紀るのみゆのじやうくがしく打まうれそくぞくろちせ
生うされてあひくるかへまじとを松ふくらるかへうしぼ
いきうひのくゆるろうかうしぶしをゆきざら人をとゆる事
まうぞく今く給しやちまぐりど紙をえんだがまつ
まあふきのも見ちやさ家るじくまでぞのと経
いま身かくと紙しくのちあかるとらぼ川くまさへて
さもあまりまれしろをゆくさあひまゐらせてゆくよ。

かんちきくのまくまつしきなるのいあんかめくゆくゆくそと
そひたれども、おそろしさにひざをりかしこまりさふらふ。
たひあ務ちくさかしをまいらせぬせし務ちぞ致し
なにとまうすとも、におふとのくゆしやうめくそてあまたぬ
ためとちまうせんぱ紫志く清正乃ちごかうとも山の太子
みくるまぞとくだし三百人かんの法ぶ人来ちくや中き
まうぞそれがどの乃ひとつのもとれまでいふそれをひとしる今こ
かんせんまた太まだしやしやうひ山上へ仏法よくくざやう
せんきまそ守屋はほ紀三郎へ六十一年毎山上にあるう
ふしなの乃きき出きされでてうのさそとうふまうしとある。
かんせんあくあまを太河めまで一日のそうるま天下枚
さうのぐさん五十宮の寺ぞといふしとわりあとし六十一
年よあひかくうそくまそをけとぞ作るうち西といふき
とぬたらしさるうで行ふまる一人のよころ乃し由と持じめ

あへられけるそいおんあんざいしだ山王の承まし世をやり哉
らんとゆりなまで神つる東まうせ示らせ世あのひ久まで
志ゆと出う今をとそ志ゆ中のうるすぱりし折よやかう不実う
まかとそかつしそささらりしを行るるそそこのまをのかしを
久んあ王るいあんなるとそいぱとさんしくみうるるやの久尚
僧正をそあけのひくおうぞあ於と見てよおくもて剃り帰
見んよとくめをこ世頭へんざりるる王

爰んるい山岩を出るるす

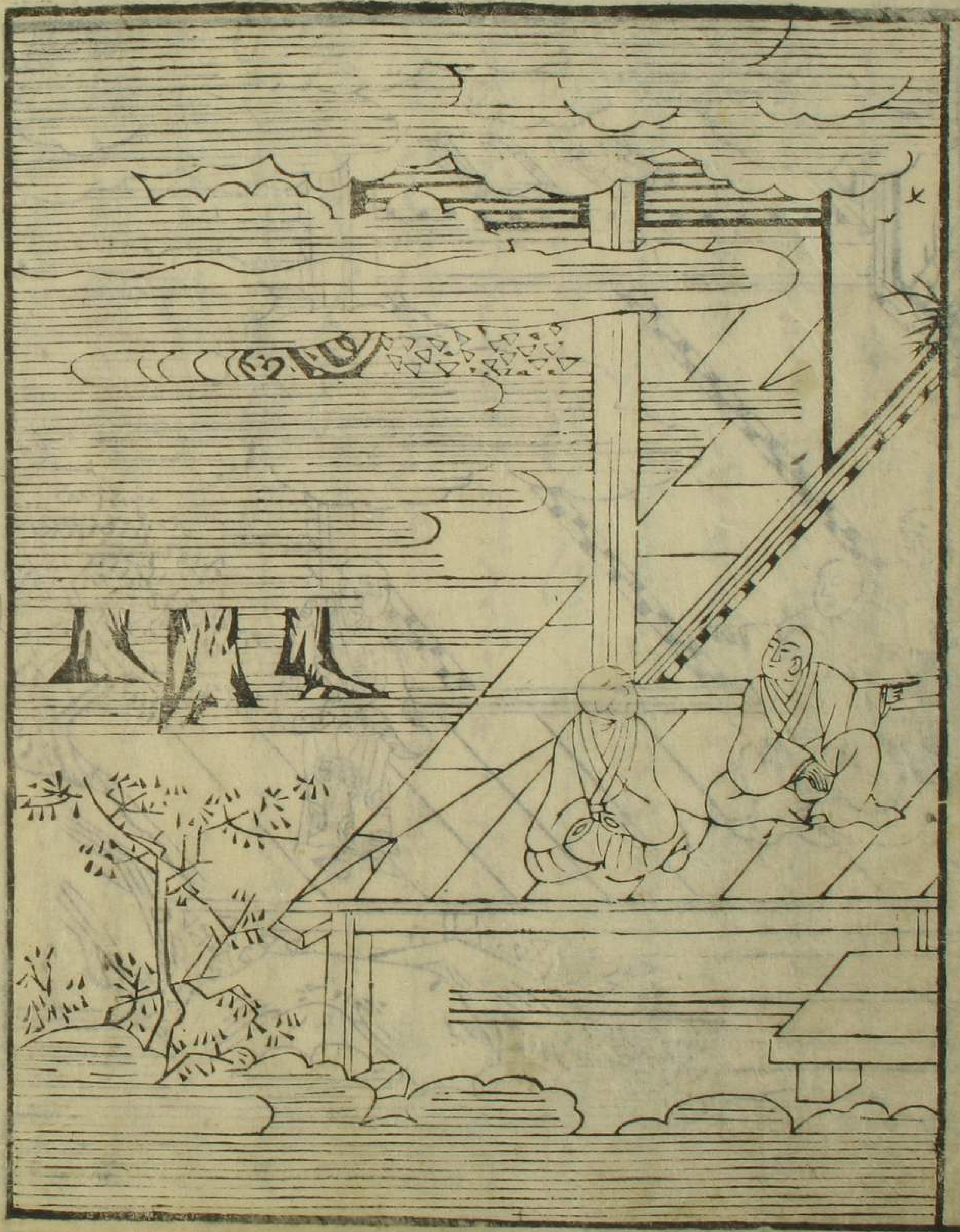
抑ゆまろ僧正乃母くこ頭へ久かりと常のくまそめのころ師
の承そう寺とに久屋うりよ志そ王んりぱ山み女あうまそ持せん
於しめりまる見くざさんるへゆうんと杉をひきちく出々
家がかくて己いけく母くも山岩乃杉ぶやとろとぞ心えれん
ごらんくくをんよ女そく御ーかうしよあらくくしそゆう
めれぎ杉のひしくがとそうまあるをとるまそそへくく海さう
乃ちかをの杉のうあえしるも入くくぜちうひの家の
母く良は久しるるをわうひぱとろくをぱしぜうちをふ志ゆり王
家らのあよみ室をう川しく見久まで ぐらそ河く兄を々
れがくそてかりじとそくないやうをそかふと久りあじと志ひ
久るるぐむかし此山よおくとこのむしぶわるとぱさい食う乃むさ
しんぞうらそやま久る卅一かくわくをとえそめく六十一歳
てあにくるぐぱ寺ざんざぐ山志やう志やくまうう志やう竝をむ
寺ろとさくぱ家もそ宿仏はいくくよぐまうよよぱかう
まなるるのよもわかしめさいそうのむさし坊といふべー尖
流にふめうるちうのの別当るべんせうとあれりそをしを志やや
るくもんるい乃王だ爰んせうのべんしとくるんそいの家き
と紙を川くぺんをいとぞ久のりぬさの小やのぐくるそれを
己ろくく寺るいはしろむさしだう弁慶とぞや守うぱ山王を
出くそえしう乃別当かとやれよ山かいしのもとにおしくろ

だうよりまゐりしとむかふはかくれもなきかたみてまゐらせ
ぎやうくそわくるさかさまどもちくごあらしとあはゝ
りんめうろくんいさうかれだいかそのさむものてとひ
くろ人もかうまたおほせをいひかどかくわくかれとく
ちよまくしもぶやうかくと文字くはのくふゆかしけさよ
くごりかふかんごうとなくめてびやうごのし御まこいふあ
とさいつさくわくしのくわしすさくよのりくおもものくにの
はのく庵を山にこもりゐしとおもひてさぬき乃しものゝ
ちまうしちやういのちとらう不出くどさのあくまでかくり
かくむ月もさいまくれかへておもき乃くにへぞゆかりなし。
ちよいしやさんさんしやうのうす
毎んなかいわも乃くにあまえら国乃ほよりくらふしよしや山
よゐまりさやうくら上人の御もとへいとけつるとまでよ下
御せんとしとらるゝお前しくさて家けのしずかやとせかくいろ。
いさよしくらしくは渡乃しもぎやうちやうかんしくいろ
人もかくはらめくらく不しもさうくうの坊よしや白あし巻
ぎやうしやさところひ本よはけく家けそく傍もさくさうの本堂
かく人よ川あかく家中の庵へとくの坊よくがくさうの坊よ
入ろく弁慶文ろさにいさんしくかずしの上よめくきなる
ふせいしくぷくそうのさし紀をしんずるよふかりしくおる
ああかりがくとさう乗あまゐりせか刀くて花とくひ芳の方乃さし紀
すそもありとも杉原をぬ法師のまへいさんせて出かさいび
くちりさ乃しめぎやうしくひされかへぴえの山ちんさのりてけと
やくまえびえ乃山そどれりさくつれとりくもに僧正の
はでしうやしせんさん流れくちやうくととえれてとく
しを慶るる悪伝しくおわ川お仏の流るる夜中の関守
さもうつきう乃まうくま叡の僧都乃かみくはとやけ給
くこ家のかるゝいくふよんよ入くはとめぐりいてんぐぞここあ

ひくわくらきくしもとをたづねのまへいさ今の世いさう
りしく力へきりされて人はそおまてく力をくらりせんびんの
とのまくえくゑるやとぞかめえり毎夢にたをひくろえか
生て一夜もまた秋のたづめのこそなきまし々ぞ見ふよ後
給せんとぞたをひくろされしもおぞりさわしこそ出をや
らぐくかさりさそてしもまくべきうのおとゝもぞ七月下旬よ
かく立より見とあゝえんとそ給さりてまでぢとく大しめ
さりをるとぢてくそわりくるふ母んゑ申えでせん所しこ
杉をひく出くるわくし一夢ぢやし一きん立らそて済
そとろあるとおてよひくろみせざやとれめひくぢだりしを
あしくるおそとろぢよしやよあめくさてもぬいさるひこ
のむきのありししのだうろいをんとぞやまえんまつが
杉ろたかえく杉はく乃しもぎやうぢや力んつまともぢや
浦がよのくをうゑんして母くぎるするちんしそみ々れさや
倍よたらう給わくへらくちよ干ぞひ出さんと杉をひてぞ
むうとのもくまら所しむさし協がきらふ二くぶら也ぞ
うゑくらろしかさはらよえわしごそくぷがはうかりを
ちよしや切りしのわしぶかくとう給くべんきいるむのら
わさしそなるとふくらぱはらそめもとたさをわしほとう
さかゝくふ切うしもらを二三十人おゐめくいさうへをを
さいくどうせんよぢかとをうを世くるむさしむうわし
貴下和まといさんたくらくるやとたとひくおちとのやうを
とうはくろのくをもと乃井へぞいてはくろぢもときれを
見くめのさたれひさうもんひくるともんふさへてし
らへとる家をたしやまだれしかしは人のまとやまりら
うはぶ母んたいへん妻もよふらしとおりひぐりはうひ
くかしそぞまらひくはさ又どもさしれのまいるの力んゝ人
まつりへんきひきそまる身のうへとおりひくぢやしとふきさ

まへのござそこなるあをりしけるぞとくまなくみすぐれて
てみくまりしろむかくそうまれと見なひてあるや
ひとのみし武蔵ぼんしく見しはへいきとらちの太刀
とおりなんとのあひくせ今ぬすみはぱ当のくしやく
むらそぬでうそのろすとまうひはうれのせんうたすべ
武蔵のもへだござしてそとひくあしまのおしやつとく
いふとのくだらうござる一間ござるかおもしろきござい
じやのよりとおいとこにゆくあら候まじだかしらへゆき
おかみくもつんぬいとまうもぬ人をおしおやしとお
をひらくおよそ名弥しく見まえばくよ物どぞ
かくまでぞうぎれでこそあまれどのちらふあく日くべき
武蔵らとおあうらくせん坊しばらくへもゆんとれ
をひろろみうら両し松をひろる女ぞま一人が
ゆへなしの名がくござんしとそんかうきれは人あまん

くまあいかうちくくちうむつきのやどれかしつくく
ちぢさとく来く出ちやとおとひてへ人くの坊主へ
めくらさんくくふあいらうをかくさうしらずとらそて
わかもおま三年よしやおうしはしそうちまへせしまてねき
おはゆるおめしとせんざうして山中まのめあとのちんおち
もそれそとるきそしめざやうじやふとうせてあらけを
やめんとくくぞめとをよりしくかうきうふしくかく
とうせんざれびざまどもへんないきなからうかかくさう
はちんをくくなれけらうそうのはうひろわろまをたさ
つまくかぞめくつのひまえた東坂乃上まさしのむまて
うしろのくえなかへさらくまへ八ぢ廿二ころへうるるかりし
のおれいしこまふおさめのまろひそくかれさそぞ出来つ
あんきゃいちま一とうんくさしていろぶくふきせんびんのせん弟
とうしみここはうふこやはがふぐいこそきしつくねおいくさ



くそぢ母のことをきゝとがめてだからすまぬへおもてへさかづきをさしかへせば
やひがしとわらでぶかりしりかゝみをわらせしきて
きつねぶくておかみせいの中にみおもらめしまいりつゝふすげ
あるもまろだしゆきてくさしてさやとねそひくがつくさしの
ちう米もとめさ入てくおもしろくへのきのち身をしてをせも
人をもゆるしてびて早くなしは人ばきれあんなるいかにもじいをとわれ義
また床とちよりも入らでくひとりのつふかにくさらんのひと
そもきゝ二のかみ茶ぼしのもしてまきて九十日まてぬうち
ゆりこゝかのしよえちゆすみしばいちやのま紙をりのくよりち
まつかりの人くかつぶ給をとそくをかを一人かりちまて
あつらせひさ浮えまでくれかのまゝしこうさくぜい茂の世
ぜいかえるべきもまうわれく衣をまひさちかとなうてるにも
ちんそとそびわれまでを見をまくち母番をもやとも

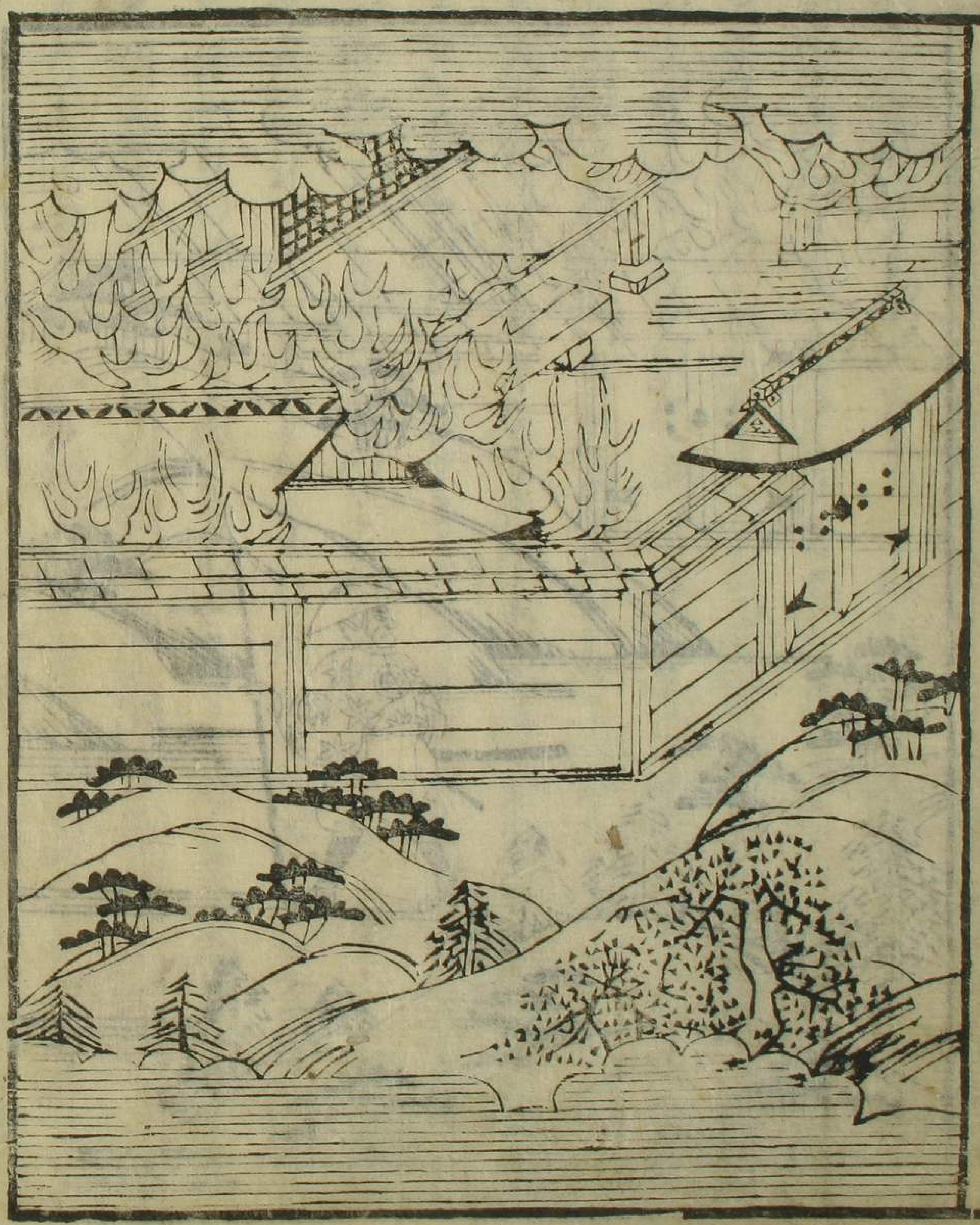
すらうさとへてさとへてさしらゝのくそかのりてうけ茂の
ひきのまさきしいしれるとてへとのびたゝくのかさねきゝへ命ども
めるこせるとゆりなのへんこいに是をみるくいかふとるいらず
と枝をひはるのよき母とのふうしめてはすわはるもまさ
縁せんおとくそとまそ所をくきけるをあるのをなきまぽうべつさせ
そのえやしと枝をひえるまするよりくまくりん名まゝで妙すり
よきらうす後ちぢともうらまづりまてこ百人いのちあるを
かまゝさりえんの上はとき中所の見あ状小身れりて一命
のこゝろぞとをこの内よそろのこゝる不思あくちち命をよいてどとへ下よふ
命して出さてころのもまだ子人ぞちらもぞまれるとことまま
よわくゆとも山をもぢおし食かとをかしくかさよひくまで
あこの内をくとみ紙を見れるわくとえをそれもいけく一字あま
出さてちるんと枝をひぞれるこまた今まもてくと紙しく
わらさせこそしての上たゆききく見んまいだしおうるそしてとそひ
とぬぞさうかなもぬぞそのるざやとこねりひろうだはさ

ちいとのぞくはやがてとたちひきさめがつかしめう
てぞよろこびしかともそがめんともれをうかんざれ
めべしせんぶるゐとおもひくせんおしつくられ小門
乃ろへぞうくれかるが弁慶ゑるまさし乃きこち弦わりざ
ちれおかうるさおれさへぞおわりきるがかくとう見ん
ぐるし考えのうれさ千すり山とやまたあやうくう上
人のあんつまうせくまへしるおりしあうるべ考人おたすう
うへおさ舟さ人のおしたとぞおしざえいてばかなる
厘すらそ考くまいゐまつおそうがあらけく弁慶ははね
さ川くやきうるかくとうの絵をもちろんはさや
うふえん乃上はおしざるいくはふくにもらうせさおう
とくがめのふ猪のしせもんのだふ乃くもん主はよしもき
厘うしやの涕ちとぞおしぬすってるとうれなるかと
猪をせるくまちれいかくとうのかくらひまがいろ厘うま
もまうして出去べうまちしとぼまさちひくれおうろうゑ慶
乃場出れをやめてくろうなるべし脆納法師めがけやと
いざきすごうふなうまくやりくるおまりふ小山の流焼八き
厘うおうがもれく脆納ちあめしふめ絵刀んおくまんぞ小
あうくきうしかふしんとのせぴくおうはさんとうく流と春もり
わえるり出き弁えりそくひしめく弁慶文も中弦刀をくださ
志まうしさゐ川しそわひてきつうぞ主の忠せきのよぴのれら
さいゐのめぐるりが弁慶めがる川考乃らくさくろかぴさへで弁慶
が法りま扱をうれるる厘つりふくい厘川りかとくくぴぞうそれ
な絵し納りゐ末年まらかいおんがちのはしれてゐ六人さ
主つきふおりるるが見やるそ刀んぐるしるとはおれかく
乃はしえんおも下小まおとしてぐびのかほふこをつ
てもてんとくぴ紅のそでを主川くむまじびくれうけお

めぐさるんてうく為ちさんとく舞楽又色いなと手まちわけ
ぢらうをさ川くなお次しけ給ら小一夜よえんより上へ
る給ねとりしきうかいえん笑を見んとくちりまゐくわうち
とふれともう川へ舞渡えなしたち川ざを見ゆ穴くの木を折
さりうくらべさるもふんさしを折川とり。むのつさしぼむなを
て一遊うま法しをうくちしとりて為べんたいあさらまで
ら給をそてくを川まくひらいて下ととくをいえんよりうをさら
おひさくむさぞこう川舞楽ゆうすやてあを之せさくくぶつ見入くく
ゆんまのうゐあさしのへぶうをはらんで忽いとひさつ舟
めて乃うい為給を川くぷいまんぶえくをはうこそへさくめ
まわきまとうくあけしあげさぷかうぞようの大まそのうく入へ給
志もとも筆給ふく陰給ちんれめんしへをれはおちさひ
さうぐるいまるえふまくいそとやりまえへんなひ見く
乃ゑ見えさせ給ふの御乃。日しろ乃庭くそく別去
御給乃乃さうくうひろ太しも志川めぷ流流のさうぐうひを

む流行ちん志づめよとの流庭くをく見ばはしゃだい乃うを
きあろまをまじとひをく一ふりふ川くおい庭といひくう
ぞまうのく舞乃ころさ一ま一尺おりゐる上ふまあげわきゐぬ
まきさ一ぞとよりも為中あびころくとあろびおちおやま
おち在くく舞まぞうどおはらぞ川くをさふくおまろく
うけよき因ゑひきよふともそまらゆん舞のこうい為ふ
見おらめて乃おぐらがゑ二まいそんむぞしくようふおう
ひ所しそくいふえろらも所しかい為んうもらまりうりえ
さーとさうえもてをせくがち所がらなげわきられく
がう年まうのくさにうちちさむおふ風るをれよるを吹
あげらればがうをまう乃のさま吹川えて庭けあざりうるを
丸ろんのかうぞまう七くんのらうかゐぬおうのぞうをんたや
年まうゑぢうのくさうよ吹付くぷうをのこころぞたゑくう

上人のほうおんにかう是をかんじめて宝塔中よりくわうをと
よ十守あそばけそうりなぶむさし坊是を見てくだん
ざいぶ川ぼう乃わざとみるべしとぞ見ぞんなりし法上
ゐんのしく大しものぞうしくども見ぐみまけしをさそか
みぐるしんとおもひてかしさうしみえしもとくずらぬ
いまは川に火をかけたくのきどもしべうだうくみつく
よ火をそ結りかくさくによりを御へ登りて行山をさ
つまくさ本郷のあし手より坊ありてだなふさい一流ものゝ
らぎをさうしてうちさとのとそ居りをへのとあらるを廿一
のゝ乃時計ふむさしだうえ志よしやを出く京へ行すな
ゝの日一日わあをかせそわあり見く廿二日乃わざうま京
へぞ川そちまるるを日も紅大みな大風かきそ人の心さをを
おかりおゝぶべんめいたるやうぞくをぞをちらるかぶひく
ぬぞそれわうれそぞをそうりるゝ所わかしさう上るを



まんぞう人あまかうくせいかんの法示乃御かうりより
御さひろがるく火炎ふりし大乃しゆまてうへりとなつて
ひろしのくうへぞそしつもくろびえうへく金しきんのまつ
いたへくおそろしき風て来まくわらがさましいひける
ふしぎなくはやらんぞやうくそうよろのほどうろいへり
主殿ひしたよしや乃山ざきのふ乃わくさ大しゆと悦びあや
その宮うろんまちくく堂塔五十宇ろ家三百坊一時よ
くわうとなるをねとよめどくくいくがれたるを屋うまうせ
よそうがんの法示ふよる是を案のなき御へたまよしやかま
きいうろとぞやるそきく法ゆ怨おり地はやうくくたがかく
そうぞえどのみしく志め出とやくひ出せとのめんせんなりき。
ち中乃下へむかひくかん進で一宇を結ひもとも再へ主らだ
ゆ河さく時をう河さまを第わくちんじゆさんをそれせし上
つとみんの法示わよさんしくちんじゆされたるかざいいく

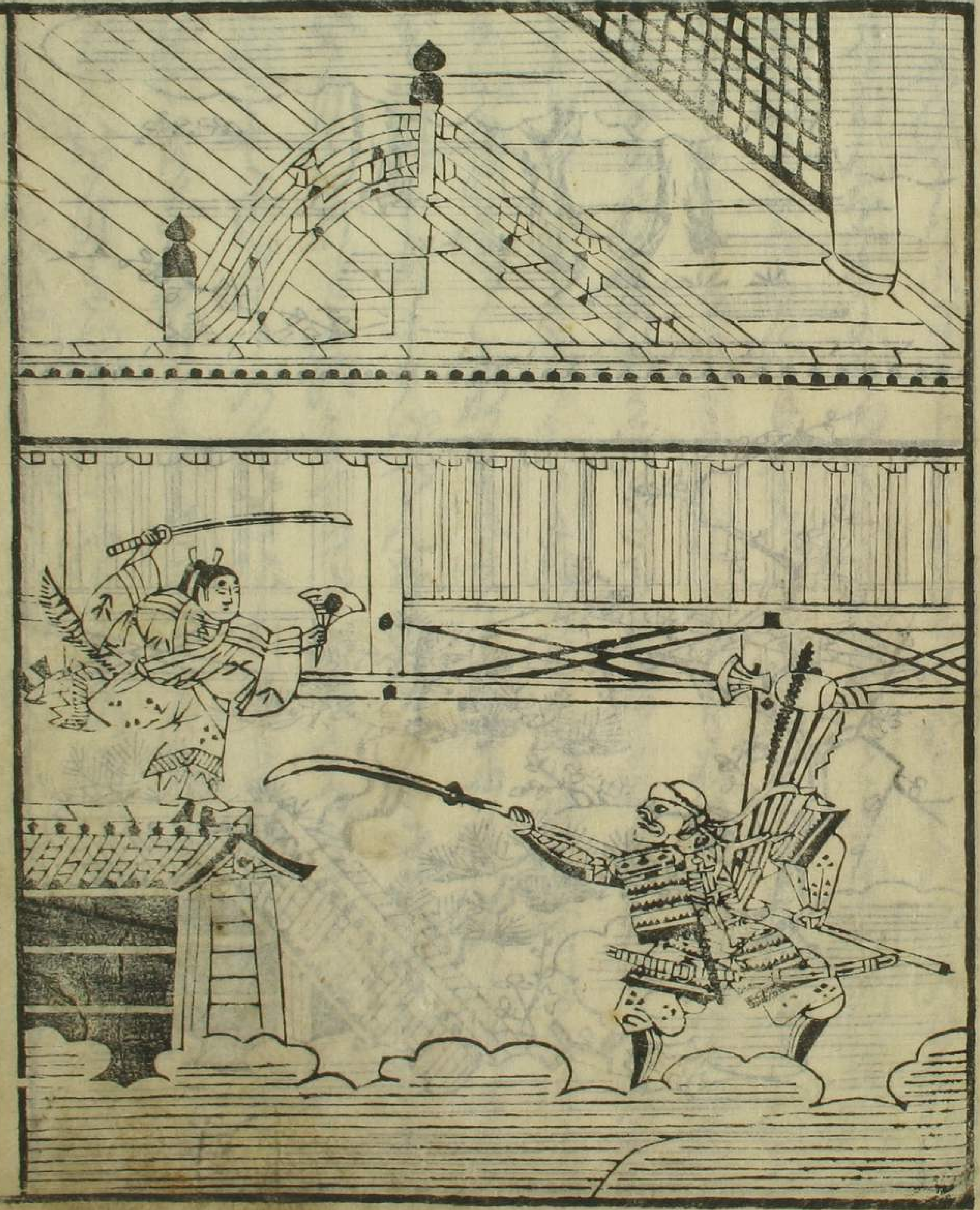
そのちゑぞやせと仰さる源氏の御よはむさし坊といふ流
はるかいゑんとゆくさやう是をきひくさそいはん山
御よしおはまうすてうんおまいて見るをわたし山上の
ふるすみなかぬさおはしめきよらんしもあつまめぐい
えんがわくじせひすしせんもろわいきんとめせがいえ
んそ経は法乃あんてさるまいちや川をおもくきこう
きんせよとくばの西乃経人あやのかた姫く首さこの
せい御くちせむかひらいきんとあしく流の頭を光よの来ち
あんぢ一人がえらひなくしまるをのまさなると心経を
らうぎうきんさびしろまえまでこてくもいきそえらん
るすわさおまでだけは御くるまともの二いまでもやとおを
ひくぐしすまる所流とてある十一人まくそこちく状ない
まこうきろ又あやのかきれをせむかふおよう見くさのしき
ぶれしそれ十一人まらいむらかざれせえく状よのせさら
とくめしちるぢんむかうよそよたびいゑんさ川かふせ
めさろさろおつ暮乃湖をまれひとつものおぶかへぬよ御里
おだしうしなかれもむおもてせわくまやうとるてむとをそ
いひかぶくいちざうぶんもわるべしさうださされとて十一人
もされきう見まふかるとむきし坊えやあくよわりゑるが是
とさいてぐうぶんちてにちうしてなされかかうくこ紀恩
てうの法羽りも御殿たろとくばいじわくし地そ志てらうら
姫屋うよわてり兵まろうのあう御まいり舞楽 御前する
べんさい海中中くくの大刀をはしるす
でんえい舞楽又さひかるふ人のちゃうかゆうそみきろてくりおそ
うあう乃ひぐ年いめいむみびさきろひろよりつかやうすわ。
まつりのたきまきを御かくみそみあしゆとみちゃうぶ色うま
ちやうかうしをそろうへくさ川かふ殿くをそかえりのおけまいろ
さいて川べきさ殿うしをかしぜんまろ永く都よのへく京中

みつてむ見ゝく人のちかろう太刀子ふかりれてく前ちやう
かうふせんとせしひらかく人の太刀をうちひらう忘ぞ
忘こそあきなき一所時源中ふそしき一ぢやうちをとあき天
狗かうしのわりきそぐ人の太刀をされとぞやうされてくて壱
しもくま一されだ後ざ乃としの五月乃まゑ五月のた
めのぐくは松津くの太刀を相手ちからひぐちかしも九乃後ざ
う乃天井ふとくぐそく人ろうらなま一て九百九十九まし
られそうらうなく六月十七日のあさの天神はまうで給
と思ひよこさの人中きう是今れの流刊生ふようん太
刀とかくへくえせびかつとえせいし松ふうなま一て天神
の源おりのかわ見んあるへむらひくゆききなまバ人の本の流
みち乃きさんふそうてまみく天神へまうつの中ほまうれ
太刀をもちそろ人をぞすらわるるものあさかくてかく
後わかのふくてらかふゆききなま一で松しまゝぐ乃日これ
所の見一弁慶の見えを出えて松をし後やさよふきて天神
へまうろ人のかくふえをかくし松んかとうやうかんとりくらん
太刀をうけらそうでしそうんと思ひくぐそうの見のちから
貴人きまーでさーして刀くらうまーでかなるうれ人のふろ
そうひて主ふむおかいて後ほくそろそろあはさふぶね
後ちの太刀のんをそよむねをあら九らふ弁慶の見をみて
あるま一太刀やかしかともあれそうんむろうものをとせひて
五門ある後はちけだおそろう貴人すくそろあるきを
んなゐいるいうくろ君るべきこ流ざうしとかいてかうも
ふ同そうもそあされだともの中とをあひなま一でなうらね
かうしの太刀をれちまさ入くあろうしを見後へはやかけて
手うらそのかしむ比比較ふ人の太刀をうたむひえたんそ
きや川ゆくあうととふえなまうてしむそうしをひろおろうて後ぱぺ
んまいをしを出るけなる人の太刀をばうぐうそひまちま

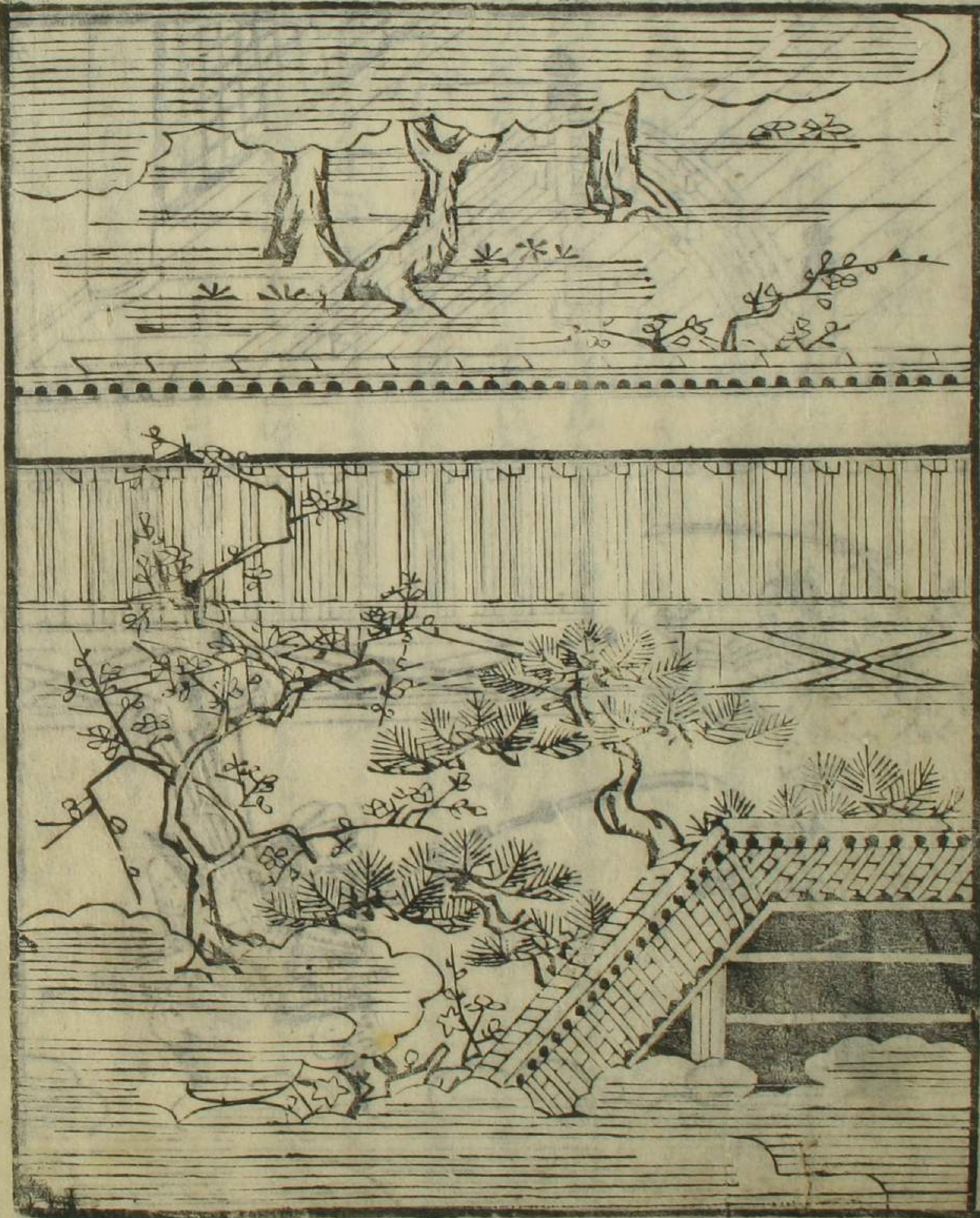
しばく是かどまる座さねくくぞうちくこゝでまがく西へと
こ家なるを打ちくく出きんだらんがふく生まれもはらさる
そしらびひそらんとしてくしく毎出るわらう生出らく
中まつる乃く今出川あちらくてさかを川下にまぐし　カ
らぬ人のとのくがをして只綱の主経ふしをあやしくおど
ひへぎう旅くえくしそと綱ともめじかれ出つくらむそえた
かりあるさへ経くく只そら生はへとせ久生むけざう是
そさくまのひくあの種きらなさ乃とのまくと志さ娘をよび
それうさう為くくえくそこく後はのじなれ切くくそうらく
それとぞ打て出せく生ぞ悲るさて名見人ゑ事を事へんとぞた
刀をぬうくとんでくくそれざうしを中さらとぬいくくぬ
ぢの身くふちゝるまち経がむさう協是もまんくくさだん
ともに人面関を生え綱あひくふを人義そのしそ打ちね
ばく皆くくひれくく下ど川流さうしきゃ川をけるが

悲しものかれそそいぱあかばまの乃くくふゆん名のりしかへ湯と
へのまへだくらひとくふ力中くくかうのそろんにさめぬ
うらくこくぬうんとしろうひまよは流ざうしらうまれそ
ゆんでのあしをさし出しくくずんきいくもちとぞ志るくうふ
ふとかのへだぽをちてるそらちぞのつゝとおさとそてくろぞ
てぞい座とい下家乃やらふ九郎人ゑらさくるう川おかふ
ゆらうととび乃おりのにぽへんきいもめひくふみ生ぬ
こさだんよ太刀をとられ手うらくちしておさされてそぞくえさりける
流ざうしは是よりも後よりくふらうぜさきとぬさうかさこ乃ちゑ
わりとも母で守はるぞだ刀も死ぬくゆんと打をへだるも
ソしさにゐくさうとむそんまるかどふどうもとるぞそてくくづ
わるゞ乃打後ひふ夜しあそくふてゆめくくそうあけうき経
畑ぞ太刀をのくぐずしか綱し流さうし乃くくこそとはくぐくふさ
座らくく翁んあくはへんえくせくまくくは地うふ以はましよ山

亀んよおちきろ人と見るぞそぽりひしそ三そんむらと
もそこちほよおぬくちんゆるきそうじ来きのそへぱ
ぶやさくぞ御家ぽれざうしそ花ぞきのひくなふ
とりあれさやり川ゑ山あらしみくずかそらんとおほしめ
しくまーたぽ山ほうし人のさるやうふかずらるちてく
の指示もなんどをせぞだかふともわきはゆがらろをお
つれ殺ん正をさんむろこめそとらひく給ふ寧さり。
此わがらろもゆらるしそびわら給へし亀ん々い大切く
ちらおちゆく住とらぽ九太乃川わがらるもわりのへ家とお
初ゑんしげうてんぞうもわら住てく中よおらし又るぶ文
そ川く殺しう人よゆしつまとそびわがらのつぶ文ぶのかくて
うるてまくすうそうき八太のうべをふんで天よわらしを
いそぽよ右のふしきてふひしよ来給ふとへ世九られれさうい
つるく紀そうそとかんく九太の川わかぞ一とびのうら不中
ちらぞ海りのぽつんでいるておちひるむうり海り名
うしは五年数とる悪法のくいくのつす
しかる六月十八日はるる不浄身のくらんなんよ上下さん
海うをへんくいも御とあれ中太乃おそく浄身不ふそ
さらんよ参らく見だやとおきひて参りきろぽおつさ便ふ
浄身ふ不参ら聴門よ手をてき見てく給て去先見て給もぞ。
あうひもかくて海らんときする所よぽ浄よめく世あれバ夜
ふ々そ浄身ざうの亀んよまいのちえそやうくされへんさい
是のくわられをし海のうえのめやわきををそてわ川まし
びくもんなんとやーちさらのと乃くむら丸のおんやとうしはち
つらし浄仏ありぽ冬二十二亀んの身をへんじく成生のねがひ
ひをなくきをぞぎそん指令乃の冬ひーけりかずくき老う
くらぞさーじとひつぴうちかいらんとのよそみくやくくき
さび川々んとちつひの浄仏家らざれ先年数をみくそくも



かくてぞそのおもとの御くらのかたなとらせくださ
こゝせいしく門おかくやけすまうれざらしとこもされだて
いかやく行ばしめしくれだとさろ乃上とかんわげをふまうまゐ
かうしゐてそこのやまの次ろくく殿ゐかさまさでおかたな引よえ
さらにものかたなをえぶけいさおうきをつけれざらしかんのひてくせ
そのうおみおのひも是よふきなるやとおひのつくつかも
あうぞぢらく門をさしてとりのえて弁慶子とく今来り
次えゐて次の方の杉天狗まく見え来より入くはれけくるや
とやくまでも次ざらしさえのやくやしの次へもえそもち次
つうちかたなどもさまびやのぶ光もくそやきうれざらしく
さびもそでおてとしき御ぶりくるそよろまてとれとの次へ
ないげもあそことはらつかざるもならとくちからうか重
やくさらふおめいくうふかれざらしたかなぬさくおそをせく
[illegible]



とうしかたおやどがもとをさださまわれみよ敷かうらぬん
うぢくせひろう流ざうしよるをまとづうかくてわそびさくわれ
とも〴〵ぐまんをんよ志めくぐまんわらくぐらし行あひぬ
笛ひとよきりに手ふれくろとのそうしかひ手きらんら
まうとぞやまきろ流ざうしなかふしもわれさや川ハけ分を
なうちんみたうおそれわうきさ手くは早うりうくろ太刀
竹力ちおとしくぐうもと手れふせそいけれ伊しくひら
おうらくを川きくめろのおそうて手めしくめしきうづ
やうぞ扨ばしめしく海べん手いはぞくとそとあらむさたま
め紙かけくあくふ流ささ手もちそうごようのの西間
りよ条事も流ずう乃内をおなうさは事までへの流とあ乃
こ系そくとりくあうりとやせたらしくに正面乃うち哉うし
乃さうしにかけさやうの一乃手の妻のえどめをさき川もく
よのこの子小忠紙供のく笛文ひろうくあしくすしきや

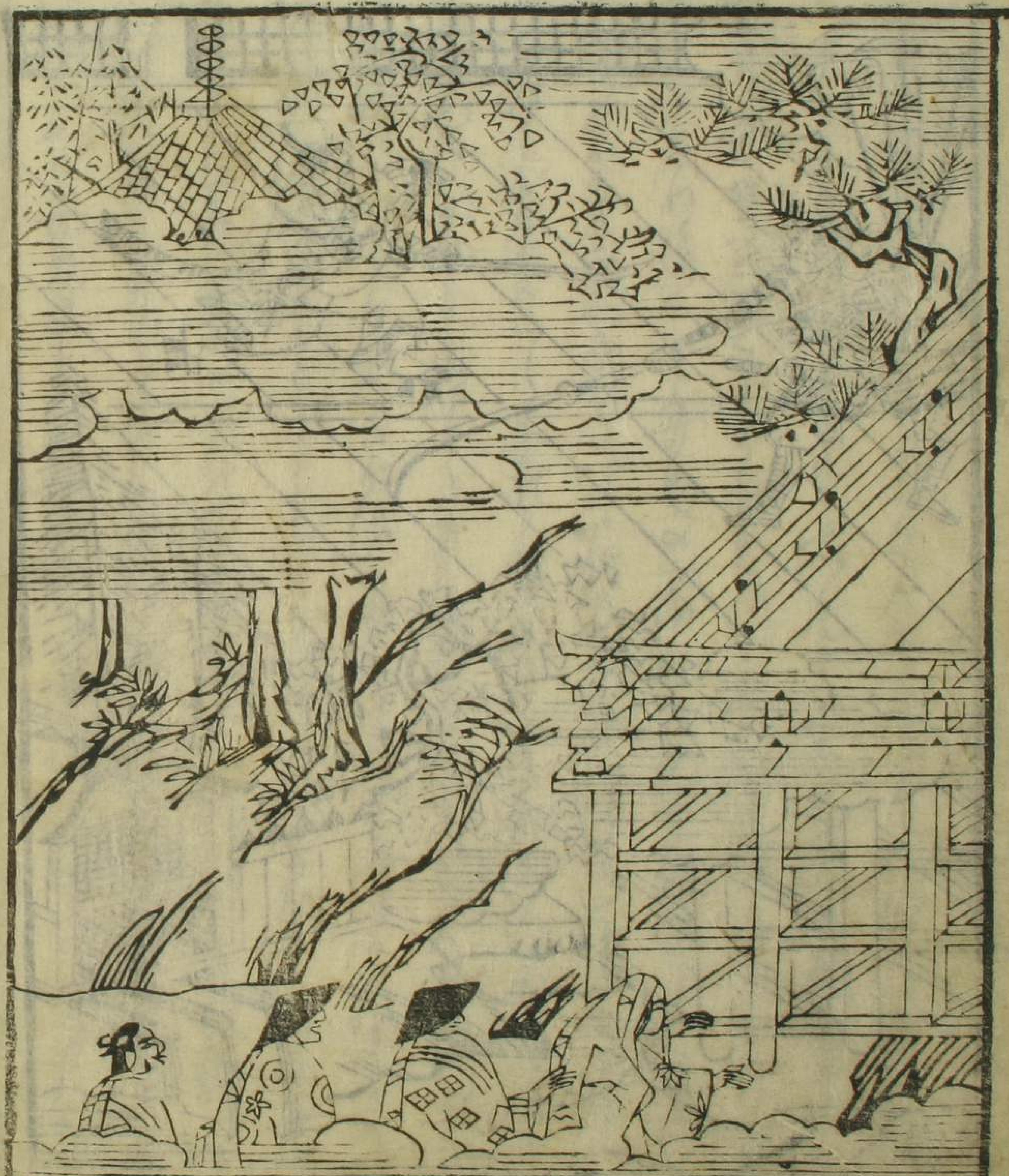
かじさやうしよんくろうしかとおもひけるが、そこのふかくいやけ
といひけるに、ゑまよさるもふかうろ物かぶりてそ見んとぶひ
てさらくるちから、なでしぶあんのなきし、乃くよさしわけ
くぐされ、ちからだちもちそ、大せいのあくろ中をわざ
うの屋くみんみくはど、よさせまへとて、人のうくるを
さくらんさくへくと、よつまてらりぱれざりし乃経おそり
ておもなし、ほそよふさんくざりもちくゑおぼらくるを
こあてしの人きちら人気をかんくあるいつめしの切り
のうけの手をうさよそせ中まうだめとして志らくまへ
おもくこさくるらんと、流されし見の経へ、毎藍の見
いずくもどもぞとく、今ありがくうをおとこさふかくおかし、けるが、母乃志
屋らぞくふくこさぬうちのわざさの経ひそうぶむさんしらい
八まい八らひそんでまくなうれ、中しぜひかくまいさんせぬやと
ぶ八ぞ、ちがふ十のさつぎゃふかくまはれ、のもとをまくかたをかく
あしてちぐうせぞうくるまるを象りまくいそわり
よろせ経へとや、さされ世のうもし、経そんべんくいさんが
いそ手よくこそのふかくるくおむくらどもおもりけるかと、折めの又
まくくふかそてまいくちされぞ、附流ざりし経へまくる
さみし紫の屋つかぞの主が屋うするおいりざさ八木の
下の屋のまんて中世にも、空の切う、なんふくゆの返
せきとるつめし入らまんぞ、かくてしおりしまゝすでそて
らうせざさなのまうこのさし、返へとおほせされ、父まで上べん
をいなさ、けれくものくまふその子ふのうまの教よう見えて条
よの入くれひもなくはそれく入条りはんと、中をこさ
むど二でうのくさとのりあえ流さぞぬ入条ろ今さいさん、び
ろうかうとみくせんくろうがしまきるおみよ流ざりしのから
経へ流きやうとおけるくさゝ付とひろいくあれ流経
やほへんの経ろへの経とと中すくさされとも見て、とし経

そぞはへんもよこ給へ敵もよかんはちんといひてうちかん
たり弁慶(ぶんけい)ハさいとうよかしくもろおの(ちゞみ)ちんあちりはざうし
そくらまのちかごうすてあらひ給くまてもうんたいつがうの
こゑはざうしのわかれの手ゑ入ちからくて二のうちさし中りくらん
だらそうあれたらぢ弟ろ人の名いやはさもちくしと志りまゝ
つま行人のもそ乃しおもとどめて先をちやうもん主なら
おらくせろんもとまつらくて打もきんもたよゑん給はなう
くわらく志ろ人乃わるをよ立もちらくぱつそ見え来せあとて
立給ふ弁慶(べんけい)もまてがんぎいめの弟(おとゝ)よおそもとる時
手もにもぱぬおとろぬ人ののいは并の格かうべきさは出はそそ
は手をと川く心くそてこなみんれとてのおんひろの乃をとりもあ
さそやうろもどもち給へ乃太刀(たち)乃まんどうりくはよそれ
立ともひはへとやうされだえそちう主いの太刀ぬてきあふおぢ
さらくいさゝせ給へぶかいよ持くそやうぶもどいはをなけらるとし

んとやりうまでもぞれのしばゑりあゝへしとの給へて弁慶は
御ぐらく太刀をぬくはざうしもぬきあはせさんくにうち
あふ人あまたをりくこころいろ木はかの先がどふんあいと
世をくさ和ゆく方をおさまれき人とぬえ主まをおろす
ぞぞゑ太刀さし給へとて其中もつまをはなざうし上和
弁をぬきあぐくもそのへでも下そひてまもつ其れを
いうき給へるび人もまて人なうそれもせざりつるかとて人め
ときを海ちとぞ女やおもなりらくべおわもそやてめさこえんちう下へ私
はうちをもわらはざうし乃戸をぞ入じともろうちんをあるを
さまたまた二人そ枕ぐてやすらひへひつくまりわやくにもうひろ
ひつ月さくんは折あひらるらどもはぢてくうざら
くうまうぱねよへにおそしろさよぶらうぞやうとそろ御らうりきれはさ
てめぐり先をとろくそて人へひくろハ押別がまさろうけしーげ
まさらうぱやちごしてまさろこよはしるそとのそてもる和そ

ちやよろくこゆうそとやうれど弁慶是を見て扨は
ちやまよるちくれするこさんあまとてしかそくらひたる
法師しをとひさうまのふべんくいさかひてそうら
あひくの弁慶さとてしらもう門さふとれ法師しをま
うけくくを切入で弁慶はゆんてのもそ下まさつさ
太刀を打こかのまてくひるむ西はちうかれむかふさんく
まうらひし太刀はまくつふ打かってよておのうかそさく
ちくさかやいるやしをしまうれど是もせんせのへのふ
てしそはらんさしてだちひまへしせんとゆしくれとさく
身うちゆれをれ法師しかなねくさのひて二ふまの
太刀をとら弁慶をさんれはまそで打のそらへ山寺へ
ぐくれちしおしはちも紙あしくも娘は京まて京
通おりて弁慶と二人しく平家を扱ひのひろ
そはなんざんよ入たしめてしりぐぐしみ二川のくかふ

そうなきのごとくはげさそひなりくるとせいみせあれく
ひしるとなくのうちへゆうとさきをあぬおもうとうてふは
みきのごの内せんまでくゆもをしくだおもふらんやんで
かわむさし坊弁慶あれかのちがくて弥陀をたのみけるを
むさし坊とらひ給ふそのとがつうのゆく平家と称らて
ゆのしきくわおゆしるそいちうで平家の上人がりにおもすう
よりぬこえへとうれさ人すつちうを一まる大せいたりよ
せいく上人をとろうず附れさうしおもひし給へれ共まゐせさぶよ
らもそうしるひとのひくたれバさうし山をもとりをあぬがいめぐ
あれいさやれくへ下らんとて都を出ゆのひぞうせんへこう
まりくまふくまゆてぞうりしれおもちしく都のうらみなるかのひ
かくぐおもうさう人公うりい今かくてれまうふゆへだし万ぞすを
そしくふしそこひるま東西和國のをそのさとりよかり
給へりし此図もおもうさうらきさうしわそせきくゆきをと

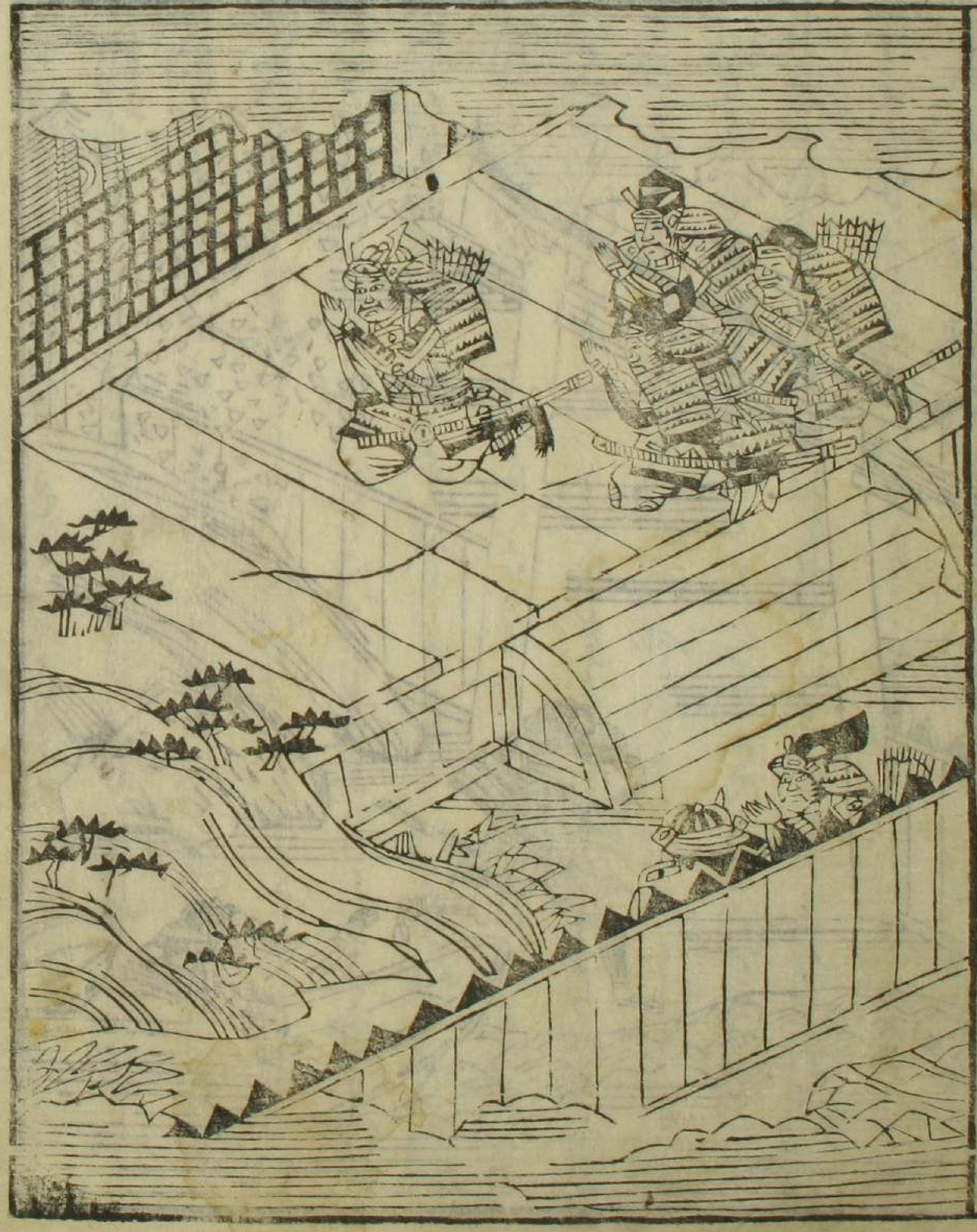


ほうんとしてせひにはへおもふとそいはいのくふちうくはへでさはらず
恐れ有のけしき人もれなく御まへは人とうくぷあそびりしうわざ
くらまでく上藤(らうけ)さ乃つせの三条のりしおぐおりしられ是
ようとうしのうれともしくひうはゝへくらうるとうと
まるさととむひかん乃うち
おせう定年八月十七日はよりとまむかんおこりあひく
ほだけとの判官(はんぐわん)と申けるが院うらめしく同十九日さうゑ乃宮
あくやかう乃うせんまろう中にまきくちひのとへさ山にはひれう
あいむかしの三年まて乃あえれとひ乃まよ山とせむるが女
宮日乃わけかのはいさのほかすれはるがさえうさと我に
乃わくらうとんずしてやさとわかし風をききくして
見さ給へ西施せうねくぷ廿八日の夕ぐ是はわたの宮さま
さ給との御ふ永く我ともせあけくぐまこ相わ舟とも乃くら
の大明神はまたもかやうくはかしのみこさせいどまたもかよされ
ぢうちの御神の志め給ふもみ給ひてけがうそん乃
はてんたそいはいへく身流はみつくとうして一世のうく
ぞうしあうむらしらう
見れたとも、おがじ我まぞいえしかえれせさわざよ
くとの乃へまぐえ県乃まと悲しめうさめて御神
とこな女のしならて
みなりしされ給じなられそいうしみせ給わかりくへ参
のくへまくしかしてわくまとしきのさえたとまでだんとう
だんざいようとさまのくそもらず出ぴされとのことうなきく
あこ乃くあん女んとふしおかしとむしめじま乃大明神のけ
おあくらうのしく乃けうぐくとまんせくつやうし候は
付まひぬが露れ中こうちうみおまかやかうさん母うめ
うしきうまいつ番のはようしとうられ始めく境深
民の志されさとえそくぷうるのえうげむせく宮

とのくらの介まゝしくをかんじよひたち給へど平宗之のふ
まくらしまらせてくをはんじのをいそうわたさるれと
やうれだ弁慶坊給り進ろうろくやよろしくなせひ
そば備大かさ川いうかくろたり給ひまてさせまかへつま
めのひとつとぞまのを〻しかもおはゆ進ざる給よかんらう
乃まごのふみされさむらのすかくられ度のうくわち中西
よきまのうくむ日をのまがいよ二百よ今やうしまへ
ゑおらくかんしおもくおちの西乃給人中からの方うはんが
いの大まよ是ら二人を大ねしてる百よ弟をせさせるさ
かんじよはくぎんし八百よ給よなまてくちう河ま
てむらそくう川村てよおもと川さのきうひとするへく
ちうとかまうをしてく川さの西さめさ乃ゑてぞ度
とそせいそせ給ひくいうさ給をうらを給ってなのへ
いう〻せしかうふあはよ給ずのきさのふ〻ひの給かへひ
あんちやうかくちかやうう

いぱかう一てよ給とへのえとうでおまよきせさう河くおんじ
まくそく是さされもまもきのハらろいはさずべ見てもとけてし
母ひるは日中たろそそとく弁慶坊乃おもうかされ
うらあえてく二らさのぐんびやうそうへ給よなうあべきてひ
ろう日かまへ依は日ひ給ぬえてくえひ日あま給日ほ
ひく給うくてしぐもちらぐきあ給どよおりしくきさ
うそのえ雨ますしむしひくぐんじとひさまそて年んとく
家もる子よ発九ゑれりあがりちんのひさえまでひくろかても
おどしのえうかきたかよろ川ぞの矢杉ひぬらおめやさうの
弓をとらくざ色きの八ゑ乃りにそ来らろぷ川さの介の
よくんざんとやまそて弁慶坊の依はかうひとやせだぞ
うまてく杉ひいまざ出おひくやいめんさ使ぬ出きを
給らえいうんはく来のみらうとうをさしほうきせし

けうまんこそおりひはつる今やゝくひかりをかゞやかく
事かしそこへきたいかれとうさのひかりをうちみておはれ
よく御こしようかれがくしそわしまかしられとくせがくちらば
のかゝ乃め人々く事つきねとくうくのまうびきの名のかし
危をせまちくらぞびきの名がえお下まとして二子
よみがいかり乃久面よみせ弟うらんじよ行く衆中
のまけとの室当まれ引すまきてうりさ乃面さ九名
ゆ八ぽうくさろとぞくよくこそ久しう進ぐされとも八ケ崎源
氏よんざしわるゝふるわられども船もくとゝをすりつる。
ひろう乃寄おたる恙しなあかくともくとさうそうさけ
乃安けちうひくのしまさちのつひもやの太られども
色ちは安ゞうけもの寄よまた陣くの太丸山すき書るを
乃ふあるれ一字ふさ同志ときれ光ぎもの乃しぬうみとん
うこし山をせまうるぞこ字まやまいゐすけるひやまつゝび。



ちく姫の御目小山田乃重なかうらせ給ふよしきこえしかば
さがみ乃守よそかんまなこをもやたせしもらぬ給ひてこの山乃酒を
紀のふをとめせらるゝ文治年九月十日むさしの國にたて居らるゝにふ
ふかき川とのしゆらいにて給ひしをかふよ付給ふ勝千代八万九千
ぞやおのへゆきたまはゞ身のあんとうふみぬなりなんこそ給へ一月わうぼ給ひ
のりなれはきこしめてこのふ給ひ身をかしまのふるはかなれて侍る
敵なきに紙しぼなかよりくさりてかたのこいは給ふをきて
れいなきてかまうえにしるしにしありてあめきゝくみんあのまゝ給ひ
あうまいにてひしてあはれるまひとへよそにをかんかゞと
くるまよせてまゝくあひきうまりまし給ひもむさこるとうら
つまやうまよよみちんなきれくなくてをそらのあつられを
ちるを川るのぐくずんじを給へきさらば若衆姫房ゑ見を取給ん
おゝくゝあ川かくひをまての給ゐでぱとたゝなくのあつらせ
きゐとおとそいて一本一常給ふよ系りかさみの若衆よ川い

てんぢんは入道さまよりやまちかられたかしの経もだんかはね
ちからまでいかほど御の色も[illegible]もむしと[illegible]ぞ御
の加茂[illegible]もれと[illegible]
すひかりの[illegible]よぢぞの[illegible]ぱりぞかくべきこぢりと
そ御かさんとく流れへかくてあ[illegible]ぶびんなりすぞゆかれ
さぢけ[illegible]まで[illegible]の大[illegible]くもあ
とさくまでもものせいぶ[illegible]よせつまでくさと
ら御[illegible]なでとんでも[illegible]まとも
いとむさしの[illegible]さりしよ[illegible]その[illegible]
のちにれ[illegible]ぞびとめさる[illegible]くりくて[illegible]べきとや
[illegible]よちぞの奴[illegible]井の[illegible]まの御[illegible]くやまきろ[illegible]
やはの乃大[illegible]をて[illegible]人ぐちぶ[illegible]いまの[illegible]
[illegible]ぞめ[illegible]しまとや[illegible]わすまの[illegible]と[illegible]
そうのがりせく[illegible]も[illegible]乃大[illegible]ちくぶやう
[illegible]ありぞ[illegible]さいあく[illegible]の[illegible]あ[illegible]
[illegible]日乃[illegible]まで[illegible]のちら[illegible]よがろとよく
さとぞけ[illegible]しよ[illegible]ぞ[illegible]とひ
まん[illegible]まえてくいてこだ[illegible]ひくら
[illegible]もともむかんは[illegible]奥刈[illegible]
さくる[illegible]の[illegible]かん奥刈よやの[illegible]とかたそうと
れにはりし[illegible]のりまんぶや[illegible]めしてひく
ひらは[illegible]の[illegible]そむかんと[illegible]
とさくさぶ[illegible]平[illegible]とせめんとく[illegible]
[illegible]くて[illegible]しく[illegible]の[illegible]
一のくの大[illegible]もの[illegible]もとぞ[illegible]
やまきろく今[illegible]君の[illegible]めしそくぬ[illegible]
がるのゑくいへとそいはを乃くらんぶやとうひくらんぞう
よ[illegible]ぎんじ[illegible]の[illegible]の[illegible]よ

かせどぞやりしきうれざらし侍らま万代へみぶこの業をとくぞ
らしきく思へどもわのひくるゝものしそてすまの人どもと
あへらりくれけども川くる三百よ引せ給りくれざりし
乃ららりさうりよそさいのせのむしさうし伐ぽ人まん志やうしの申
しの御さま事りそうぽいこち場いせの三人ざ三百余
清三郎ぐ道し皇ぞ段そくのぶまかでしてせ三兆だ大する三百
ら紀る乃ちらくもちもせさらきでさるりきるぞ大刀く子
まこふさうぞえせ上るぽ川ゞしの中山ちせあさこくわぶち
のちさこうちとぞら歩きうくのちそくちせ九郎人だやせい
こそまゞくよかり年まうぶし侍くまうろうぷわうひるる
乃ぱあうくせあるひろてもとせえせくごうまそぽせうくし
ちふとごやるも是まおぐくき百五十さ清ざのしやうくれが
百さうすさころまくひやらくもうそやさのぞとわかしな
ふうぞらべくらどとそどく歩く途ぶくあ者ゆせかくのぽら

かゝら紙らいまも紀らくさけえしの志西くれ侍くちぬ紙やとき
めくぞぬ阿乃さくもしくら川乃こゝやの大明神ふしお
ぐこ系しせむろ座しまゆせさうそれ見てくむさし乃ぐ
ちのこかりぽあもとはよ清さのぽ流ざうし乃清せい八十文
義ますぞなりまよくれくさだしふたせ侍く出来作なるこ
しとひのへ行きとひもとそまくせのひのてひとやむさし
のあう乃玄蕃乃町よ侍くとけ成りて御くまいだい柳と
そひく紙らせのひてはぢぐさ乃ひろ清りよとぞやき
茶ぽひつりよ侍く出のあのだのやわしぐらせさあえかのひぬ
とぞ出のしくくはとぐん三とちあくてこまよあたもやめてう
ちあのひ久かどんぱわしがくらあへていばのあくぶよ
侍あの金とけ成るさのあさとぶのひくぽるげのくふ
くみかん乃まちえくう紀しまよがんくふとやくれだいざそてき
かどちりしかくこきよさえやあそぞいさうずまいける

義經記巻第二終

義經記巻第三目録

よりともよし經に對面乃事
義經平家のうつてにのぼり給ふ事
こしごえ乃申状のこと
土佐房よし經乃討手にのぼる事
よしつね都おちらるゝ事
もとよし大物にてふなせん乃事

義経記やまと守口

ころもをもうしばしは射向の袖をす
九郎はざらし源組が本名若松ひ吾妻佐秀の津乃
大夫お三郎だちうきはしらぞのくはだそれぞれだざくらく息すぞや
まとめ出づるゝ佐藤兄弟佐藤じて家子は白旗志ろ
志かもく武士なる武士ならず六十きずらわかれてくる
ましまするしん松ぼはるかし。信濃のへくる本名には志でぶひ
てやくまいぬ。甲斐の国京ハ二はなかりつるる人そ飛
名あるさ矢の武蔵坊らく来るとく。城の法師とのはひよ
てはかをまくれ家のたる山本わまってひさくして来るあひ
其ぞて御たる江一きをも見ん出ゆきる。ぞ黒ゆよ白志ろ
し母くおえしましにあて浄人かくも。せ法ひはそ
個名は矢は世は母しるが小柴江へと猛念家の松風き母くは
とやまる道だ。其中よ女王はさかるなるさと其の。文志ろ

く忍さするがわらぢ乃母しきのひくさまとむらさき
まうごのようひのぱきそ金ぬうちくろやきぐ白かりの文籏
かぶやまくそぐくむくおくび母やぬ大津黒の矢ちひ重
義乃ゆうかりちくぐろあまる乃やくそうくまし武母の
まるるがおやさしさを出しくやさ連ゆろうがゆくてあまも
志うしめきまつくはぱらしうがゑらうしまとしやすさむらひ
がご進年與到まで下向仕りけるくわいひけるが佐藤殺の
よし義りおもを見よはばそへを世まじくは見え氣よ
いまつくうびはへと仰し進ゑれしばらの勝ちらはさせてハ
は兄まふくはましくくるまとぱるまうちんで打ちばはさう
さのめたと佐義こはさよび出しくたこさくはあちぱ保お
ら一同ぞうるまる我ひら世くるさがくて佐多乃はおま
しらはさしなやしよきをまむ。作兼ハ言熟よまさちがぬ
人母くいおさしきまるるが今度をるすのが母うまつぞ

みくさうつほあまへれらしましに見参せんとの給へは
頼朝は御ぢきにあるまじきとおほせ母ひめしとおほせ也
も大将よろこびいさみ給ひて佐藤三郎同心は
いせの三郎はあまりてさめしはまづ給へ佐藤は
ぢんとかしこくて大幕百八十町引まはされたぞその内に
八ヶ国の大名小名あつまりてぞのくさきざきに
ぞろくとつどひけるなかざしきとうけたまはる刀一つをしも我
ことまうしも佐藤三郎こそふぞれらしきつかさうしたし八
かずさとぬぎとりてふもとをゆきとあかちな給ひしま
たものきえてようしこにくそそれらしきつかうの給
とのしきかくさきらまず我をそまゝまぞなく
まゐらぞれへくとそ給ひしてさうしあゝたらは
まゐらうしきぬしきゝぞなけらまけるとの
ささうしとかくめてさんじくぞうなるにこそ

そむきたてまつりければ、さしもそのころ名をたてしとも
がらもみなおそれてむせびくむのみあづかりしかば、源
乃ゆくすゑをなげくのちぱかりけるみなこゝろおさへて
さてもかゝるのよにもときうつりぬればいかでか
ちはゆく末をうけたまはらばやとおもふせつなり
おたし候ともみなくさしはりしかるべきなり
まあともいまのあまり乃ながめちまつりまゐらせて伊豆
の配所にわたり給ふ東北條よりも護せられし人のまよめ方に
ても一とせ奥州へ御下向のなりしを聞ゆるくにのうちど
をおとづれまゐらせんとおぼしめし、あらたに申せし思
まゐらせておんかへりをまちつゝかゝるまゝに入
候ぱや先は人々の大なるをまちて思ひくれそつ候へば入らせの
人々を初めとしてはや他人なきまゝに八方の一大事をと
おんもとへ人々もなし、当年平家によりてかゝりひとつにおんまみ

頼朝かならず存じぞとさしかゝりて都へのぼらんと存ずるにつきて候
がう平家乃のちのことをおもひて父義朝のちうことを
おやとおもふ人ともがらたらんにも自身もともに候
八条園にひきつゞきし代々のかせんとなりけんやまとしまし
身ももたし他人とのかせんとも通じて平家と一所にな
つゐくて東国にはやせめんとあそばしてそのいかれ
恋かし今日はへんなきゆゑにしのびて候ふ所ゝの子細をかゝ
かつてそのひとつを思ひまはしてはやくらべきせんぞ八幡
義乃二三年の合戦ぶむかふの城をせめさまをしたりしまゝに多く
勢をもまゐらせて上は無勢にして厨川の城をうちたりけれ
まもなく思ひとどまりて城をとりしむ八幡
太業無涯にしたがひてかくれしとのはじめぞ
てもなきとどけさせてくらべと参りたり
清大かさ川の栄光をやすくおさめたり

と刑部丞内裏にありけるが俄に内裏を出給ふ陸奥
列乃おほつるにして二百よ紀ゆくへ下り給ふ淡路に
てせいおくえて里三千余騎ゆく梁尾川へ出て世まく
八幡太郎と一所に越へ後に奥州を志てつへ帰らる所
の流れに転変流えを終え来らせてらんのいびくら先に
まさるべき業なれば後の世とそのごとく存じてぜん悪の
えちごとむくいの亡魂の情を体めんとれのひもあへず。涙を
あかし給ひ名りぬれぞうしちろくの女まで思なくして袴も
さらぞ走わらる主を見て大きに小おそれそろひのへ
ゐうらむししえて是くらふ袖をぞぬらされけるぞとく
かくれざりけしききまろうにおほせのごとく幼少の時は
めかくうちて給ちの給ん然る所に下つるのはるぞよし〳〵
も出しみの母はしまきいの時くらまへ来ら千六まぐくう
あのぐくるち文とけら頼ゑて家教よはしが涙く年中紛え

うらみんをはらさんとよし経ハ奥州より下向仕りて。ひやうゑのすけ頼朝のよしみをもつて世を
しづめんとせしところに頼朝ハ義経のいさほしをそねみ給ひ
わが身のうへに及ばんことをおそれ給ひて
かくしてよし経ハ終に奥州にて
ほろぼされける事こそあはれなれ

義経平家の討手に上り給ふ事

さるほどに寿永三年正月上洛して平家をおひおとし。一谷
八嶋だんの浦にいたるまでことごとくせめほろぼし
平家をせめ亡し大将前の内大臣宗盛父子を
生捕二十人ぐそくして上洛し。院内の見参に入その
ころ元暦元年に検非違使五位の尉にまかりなる
大臣殿父子をぐそくしくだり腰越に付給ひ
しかるに梶原が讒言によつて大臣殿父子をぐそくして。

越にはつきのひくはる身と思ひけれども日ひは村右衛ハ方
に押ん寄きしたさ〳〵あつはらの安〳〵ほど後いうにとし
一谷乃合せんにおやう乃三郎あつ乃安かん三位の中将れ
下而すは三位三河乃守の何ともゑ〳〵はせ村右太郎いろ
給ひく三河者乃大にのうかく〳〵て義経がはにーそれら
るべきとのがきう〳〵といふちんさふつまひつ縣せくうへんと江
も京都がちう〳〵ひにお肥の前名のまもりて〳〵そ村右ハ三つ
まり給しくでも上平家ぜ打ちて関ちかもはしゃ任給
ちらんを天に二乃目すしは二人の主なしといへ此後ハ二人の
務寄や わんどんと相はせしぞかしくて武勇の半ちん
一度も子まねぬいてくさゆを風波乃すんをおそれざ安かんでさ
たりつき給ひ字魯のごとし一谷の合せんにて城ハ無双の城や
平家八十万にきたかりて六万余々にて紀の城を無勢
丸〳〵ぞを見て多勢のにて家の勝負城ハ多勢
あお内ちん堂ふくるて無事国のちからはせくぞみやまくお腹べき先
見てはたしさうもしとひ家さおとしてく〳〵事ありのもかるひぞさ
さかんせきとぞ無勢かくおとし平家を被よぞひおとし給ふ
すハ元まのまさなりくむとで平家八しまの家まで大風そ〳〵なりこ
ねびくて落て一ノ谷のかすか見てぞ夜うもなうさしせてうま家を
うかくえせりてしずりに又十に紀すそぞうなく八しまの
城にをしよせて平家乃数万を紀とひおとしげんへの
乃ためのくさまつくも給ひにのえ者をせ給たるぞかんうも名
すも其かどの大将軍にひとくうの本さとく東国西国乃英雄
を一同におふさきひめ家やしとさしたさ〳〵まへすくおそれ
ん人とも情をさするひまとく見め給うまら事しつる給
外戚のむべきさまれとは虚に家を替んかすまちて
よりもおかしとおしてぺんをう〳〵年ありてはぞれはさう殺
うまくし中に入家を給くはざいえんさせ〳〵はけ一翁

それより若乃因果録をきゝてさらにともとなれどのこの孫乃世
まはりくはへんとしんぞ又此一ツごとやつてもないとのござはれんと
やつ紀で若ばりしきさこしめしく攝家がや一つの八鍋家を
そあるドかまた一つ事紀やうへあひえゝえんへのかぜいさらの
けるしかしもきこらきさらなまた八明白気にて攝家のまん
ためらせるを江へしと信しまたらば大名小名莫等て今の
此経乃、とくまそで我友りとよきまあやかやもおもく⓪八そ
しぬきより信ふすのえなあへざまどもる字けつさる信えて
ひとの海乃やまさらあのなんの浦よらくへらひみせんかをえん
あらそひく矢大の紀年れあひ書舞にて信う母従え
え世八ばはまをそいうてわかれんとやきづめしおち近ん、
て信しまいの時母攝家仏ます一ツ乃志ぐくよろに治わらく。
倖手しきぬより家織をとさく条らせ久まし八ばしよかてそ
大臣なとばあしとえよりてう流くしよ信流れ我友とぞへ藩誠

はとくめぐるゝ、我友せんぞのちらひとこよめ、たらば縦乃ときとが
申せんよめまとくつのよわとまれ我たいずん二経とのゝさ
さらよくはあひくをひをしんとてしまそ身をくるれく八かつま
ひしぐ悲哭にてとこなをまんせるるふゆを孩りひたるはかつぐん
なさうをもときをまびうてよとる因果乃光をき薏ずのおさ紀え
え攝家めい悦ゝんごきん事凡両雪にく切らく楽川へさを川を
え攘をぞまうくぬをとを逐さく、歎とも一ぬらくあし後悔
経へ其甲斐ぞゝる紀がまくらよ八二経義後ごうえのたまれを
めしく紀びがかんの此さ志よのきに紀まくるを世紙刀てさん
と肉くまはくむけつ面乃将ぞ此ぬさ紀よ舞誠よめを
むくひは江へと信し是まくれば川銭中さまくらな信る余てそよ
江へ采の此経乃背き中へきあく八ぞ⓪母ぞ門たらはらう
めうくはなうよむまあなくはりの世我友夜乃めぞくまて
作るのまあくハいそえしくは他人を信待しまはへとや接く

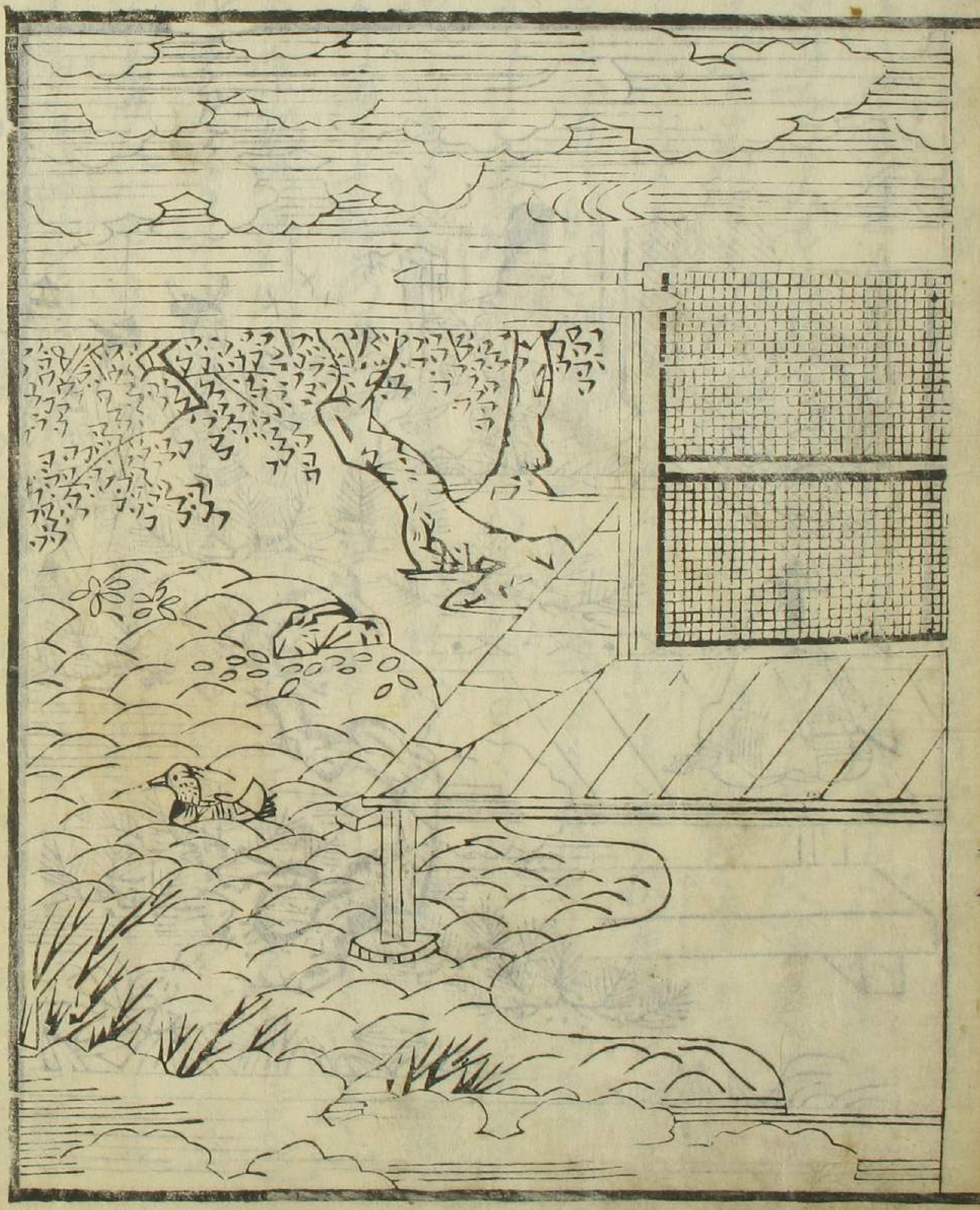
ぞくまゐらせともまゐらせバ舎弟にも仰出されさぞ又畠山を
めしく梶原せしまゐらハ川越みやしらへぞおもしくありけるや
てなりけりとやされけるとそ世を見てさんとかきかひけれ九郎を
まうすべきよしうあれバ其思ひ斯くひ給ひなべし。吾妻なまま
さも候ハ伊豆殿海女をせめんと給ひまゐれハ畠山を
はなくぐらぬ人おほくすされけるハ、梶原もさかくにへ廿八騎
大がさい乃梶ちかひみな人の申すまま御国他人なりとも家人
とまそちもんとらそ此にハ他人と志さし身と云ふくらぶまゐらえ
ぬとふ労るし梶原とやまさ一さんの條まりへめし候ハ
郡くおたぬりぼ過ぎの從兵にまさる年来乃忠とや申し此兄弟の
御中とや。繼は源氏にとも九郎なく人々そく世に候らく。
奥まで身とらく恙げくてに給ひ候へん事とて伊豆殿海女をとん
志やらの門出給ふ事をまゐりく京都乃ゆる護ま世をき候、
世給ひ候ひく。ほうし給ひまゐらさを給ひく候えんかとの御れ

やまさるかいかなるすぢのふしへ事とぞ思ふおもくやまさゐらせられ
まぢ二位殿をともまるとて梶原しめしてまいらせやうに梶原八給ひ出さらて
るるもなし腰越にまゐらせ候ひて事給ひくおもんぞをさしへまいらせ海
さらしは義経乃きしやうをかゝれまいらせらしまゐらされ大梶原が切れ
すうりされたびかさねて状をぞまゐらせられける

腰越乃申状の事

みなもとのよしつね、おそれながら申上候意趣ハ御代官の其一
に選ばれ。勅宣乃御つかひとして朝敵をかたむけ。会稽
乃恥辱をすゝぐ。くんしやうをかうむるべき處に思ひの
外に虎口の讒言によりて莫大乃くんこうをもだせらる
よし義経をかす事なくしてとがをかうむる。かうありてあやまりなしと
いへども御勘気をかうふる乃間。むなしく紅涙に沈
む。讒者の実否をたゞさず鎌倉中へいれられざるの
間素意をのぶるにあたはず。いたづらに数日を送る。此時に

高くあつくなんぐんを抱しまくぞて骨肉同胞乃義深ゆ
ゑとし宮室をたをあらくむるしきまよ浦ゝろ。かの文武名を世るん
素ゝ耳をゝんぞろ。然しきられし条。古今文武乃華経
のぶんまあしきもん。八雄人ヶ志を乃悲歎を十ひろん仍
乃ともがろ乃哀憐をつまんやらの新さか扶桑ほまいかり
といへおよしは五。別離のゝを父母よりきいたぞく。断絶を
愈ぶしく。ぞ以為他事乃為孤子とするゆく母乃懐中
よりくらまく大和の国宇多郡龍門の牧よ趣しゝわり来
一日片時も安堵の思ひよ住まさ。甲斐なる紀家を存まくい
つとも家狭の経廻難治の為がたを存く。所くよかゝしぞる去達
恵祉を見んとして。士民百姓らま悔ゝしせしろ。志ゝまし。氏加ら久い
忽ちよ志あんしゆくしく平家の一族退治のさあよ上洛せしむ。
先木曽義仲平朱戚乃娘平家を責ろふまんぐてめてよ誠時
とゞくゝろかんぜられ。深るよしらさいくぞ。紀乃くめ父母為を



かゝるほどに日をかへり見ず、汝(なんぢ)ひとへにくろき大海に風波乃分
むかし漢ぎ方を海底にしづめんとせしときより、まぎれてかならず国を録
鯨鯢(けい)乃腮(あぎと)にかゝりしかば、あまつさへ甲冑(かつちう)を枕とし。弓箭(きうせん)を業ともせ
ずして忠勤ならず。亡魂乃讐懐(しうくわい)をやすめまつり、年来の宿(しゆく)
望(まう)をとげんとおのれがおもひを結びしが。おもひさへ絶ゆる又の紅
の弱に補佐(ふさ)するゆゑの条当(さうり)乃ちからもなく、ほどなく
あらんかぎりとして兄弟今はまことにかなはざるせいなり。将乃内
ゆゑにけふよりむしろおもむろにすぐるべきとを、さいせんぞよ
清く流るゝ流れ乃牛王(ごわう)宝印(ほういん)のうらをかへしくすりくだんを
さいはひに海ぞひむ日日に中太小乃神祇(じんぎ)を請(しやう)じたてまつりて
ろうかうして数通(すつう)乃起請文(きしやうもん)をしたゝめ、世の中の名人たちを
しかれば郎等(らうどう)も八幡国(はちまんこく)にいたり、神のひかりをうけたまはり
またおのおのひとへに天気(てんき)を修行して、この事をなげくに、はや
ひとへに全(ぜん)きずして、始終をとげしめてやすらかにならんことを

ゆうぜられぬべからめんにあげられしそ、候者の経盛の家につたへ
およびたる紀をかうぶり子孫にはげくべき年来の恙、
びをむくさ二位のおん孫いそえ出紙によりくさぶぢぺらしあ
らせいやふやくせしめにかきらんぬぺらし法に城之法をゝ

元暦二年六月五日　源義経

進上　因幡守殿

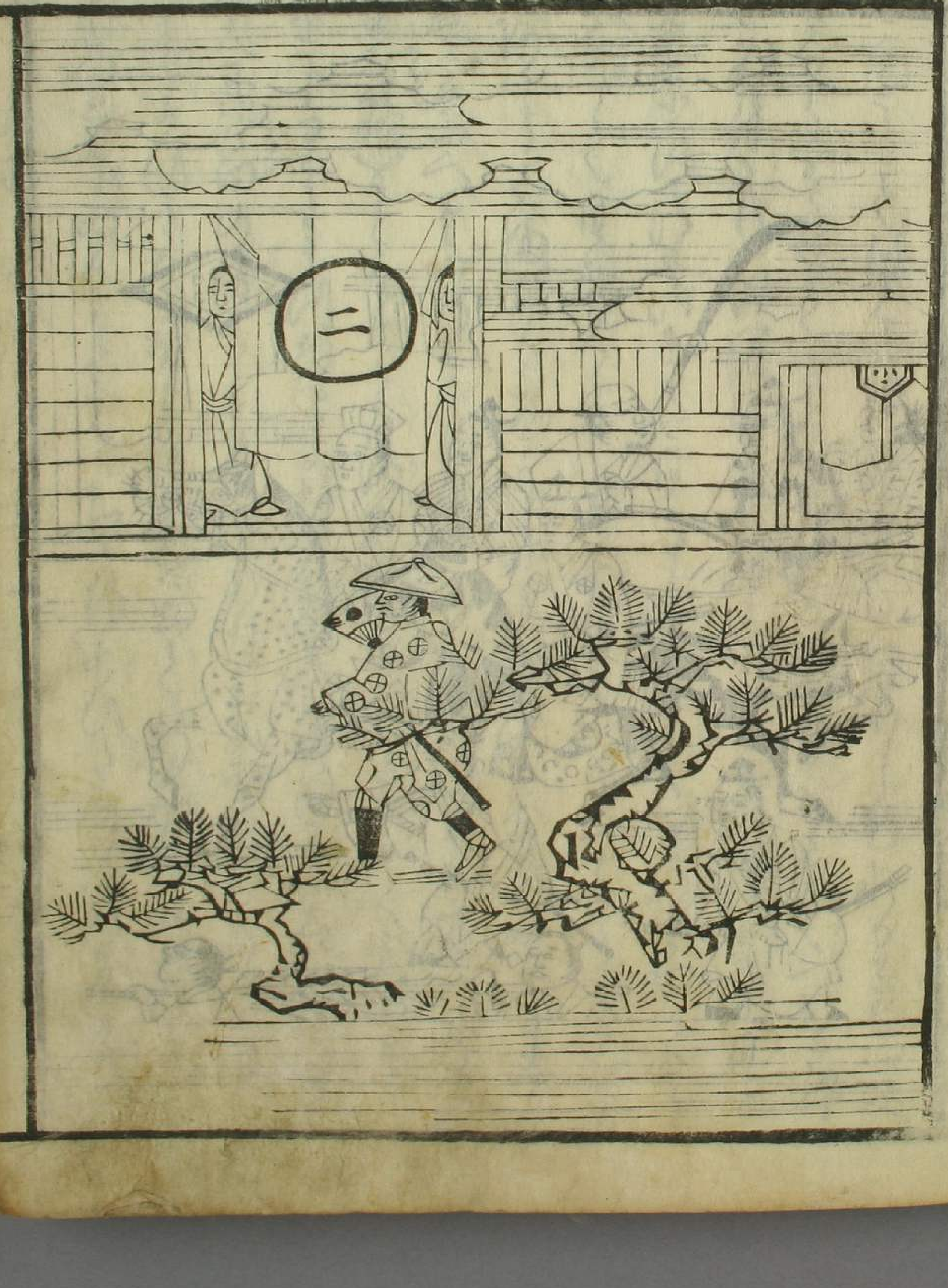
とぞかかれける。是をやがて二位殿をもつてめはらく法殿
乃めんおほせつくろおほく漢をぞるすらされたろぺ捉てそ六
らくさしをまうされ判官殿よりおん乃法親殿よくて家
殿のもち讒によ八義経によらろもくおほじとの法をさはよくきり
覚の川ありきまつぺかくて秋もくまうて乃祝すもありし久
梶原が様つまやもとをくれしくおぼられよ泳き出中たままはべ二
位殿さしとやまされたる

義経腰越の時によまるゝ事

二階堂の去依房め世らくめされたり鎌倉殿のまへ一せよ
おもしろく土佐房めさまし事乃梶原とさき多ろらくおと
やくまう二でも鎌倉殿さへとめさは法殿をようしこまり海ふとを
めしく去依は海の中せうし法経をされ八梶原かのおかう
まく取りたろも鎌倉殿伝しまう久八和田畠山よ伝へまう
はあつく是也とおもらいまだ乃が殿よもとくぺ虎乃法さしよく
うち伝へはよ世々伝をござさんとまろあひさ返紙の大ヘなり
伝ぞれ此ぞえんのまうは八とくもちいまへ去依ちらかはよ野へ勢をも
乃あしおもを殿の案内さんなるまひよらくかくさらうちく来
らせつよそのうんあるは八安家上総を殿ふるぺきこぞ伝へ
まうろぞち依や音ろをうしくこありたれ依一門をも切らべし及
てよの山まと師を義りびくそながけさ入殿下法とやかされ八
くまよりく殿き去りく大まよろうりまおほくぶんしさを殿へそ
去依法く去んぐくこそひけるぺかさいまく伝らまうくらさ扨八九

ゐけるまゝにしばらくやすらひ給ふ所にせんたくせしところに野やの
くびをきられ衣のめいかりけりよ人によりて合戦には御合
を持ずしてはかなふべき事にあらずと思ひさだめて給ふに源は
はんれいはかれ多くは入でも年をへだてけるや源金吾されど
でも其はからはれよくまゐるべきと存ひ候へよ
かまもゐのかみ源ゑ出ればへと給ひまゐらせはやし
まゐらせ居りけるつるぎのゐけんと給ひまゐり神だ
れさめどのかゝりけるを八一尺二寸の太刀で御このひ
なかの紀太郎しける給ひてうちとめまゐらせ
るの太刀ひざのよそよりその給ひたる物は大和の
ゑんどの源ま人にけせし秘蔵しくおもひ参らせとも歎
き給ふの事なきをのぞみたんと給ひ判定を討し時に
やさしくびを給ふべきなりと思ひてその身
九郎はくひ出さし給ふめでたき事をせすと給ひ参らせ

持だくぞやしくかゝり根原をめしつく安房上総の兵ども
太郎の伴せよとぞ給ひまゐらせ葉をせんかた紀多勢を
ぞさせるよせ合のそそ給ひへくきるをもおどひ勢をひよ
つまりて郎ちりせんとおもひゐまゐらせて大勢はせんなく給
とさかの国勢だちりまくのかげをはせんとやつく国勢はいかが
おもおもとの兵へで百人ばかりを給ひて極を不足なりと
そ給ひまゐらせとさ彼をひけるは大勢を源まゐ上りなれ
をし志れ彼のをきかん財くんとりてもいぶんせさんもまゐる
しせんともまゐるは安房上総の家の物ほく国ひもくぞ
源平ともなくて不足なりとさけ乃むそくにはあんじ
は浦門出捕給ひく二階堂まよ海りがるの弓矢にひきや
きつるて極金吾ありけるにやとそ給ひく出へ志きかな家上
るひしくちよちて入せんとかりて国人とせよとぞ申けり。
そま事は重くの勢らか又なみをめぐるくのうんおかは



そとやせバたゞおやを討く事かせよとの給ふと所くれ
さうひとまてぞれよんえきうとのハおんよ給も令
おうらくてえそへんむすまづきく二つびうへりバしそうや
を服もきおうひハ重れ世よれな世ハ取るもなが毎
無事をさうんといさむものをきざまーぞんハさ毎く
ならむ去依ハめとらうしう紀まれなれむかうちまつせて
乃京よりの禄物をかぎすまりしとて御ぬの生まれ
てうかなやう急をおちらへて甚かりしがくもさぞ法さ世
法師よハとくさんかりてとの家ぴひ世さうらるまにむとなりん
無忘とくつき部るとくんづき川名ろきろひくしきま紀を
入るとうるひ川を出さも無く法うとしめどう行ぐ海乃に
法ハ橋とのふ好ぐを川きらうとぞ海く夏の吉日お
友妻乃無月をえて又ひ九十とる歩無くうまくうるを立
てさうう乃うめくるむぞ蔓そうく所く御出去

帝乃ゑいかん八ちからなき次第乃ありさま婦るの源
たりしゑうしとゆくりもなかりける何わしも物かゝる一定
よしゆくしをせくそのきさらぎまるをさくつきをは
るとも御ちかう御紋見へ清きゆく頼よ九月を
やよ家に渡りくわまく日くろしうしく国乃ゑやうへう
なもくうくほきくし左千ゑさと三条より宇
ゑゆほのしうさ度なる勢うみくゝ十六歳みくまゑの
身多くる事にそのゆきよりのくろきを引さらりて入水ら
猿楽大路をとをらく清水寺にもらくぶのとう
めんを下つるよりひかとよ判官殿乃御内てちん候
乃侍人に河田の原にてゐとのおりに三条京極くだり女乃
まくよきよひろうかゞら御座を出くわかとよろこびれ
ひろし乃ゑらめんまくえくぬて後おひらう人乃屋形の
わのぐし表示まく見えそれだぐまのおくにかんちしてい

ばくちの宿をなんどとちん湯をあらそひして後湯を百人まで
たつ二階座敷を作りてかんをしくくて作がいやしく大勢あつまりて
さいが碁盤の前もたせて将棋盤をとかくひとおへんどうよぶて
かると麺類をと酒中にあんなからぬへらぬおふとなくよ
つるく問やと碁をひたれ共おのまのまへにほくまいり
中ころあしくして其作が下人めをもうしく問やと思ふ
て給仕のおんなのよくよくまでも世のちんとしてうの場
つ湯乃小縁座敷にいづる人多く問されどもかく所
乗し人けるが酒田をうまで故に年がへくくやまかるなど是八の
ますの世乃湯とやれ大名ぞと聞えれど是八お摂国二ケ
いづうれ其作屋とぞやくくおやとらもつとの花乃や
ぞうるぞさるもおますの二錢くんぶ八を家として三く鳥。
なんぞ日本よ京入まで志ほそぐぞさ世く見てくし
ほつそ錢さしてあるからぬ秋をくしとはなや

きくきまで今一人がいひくうるのくじう見人のいひ懸ろ
あ二日をとうつまうわつかんぜんといひくまへ今一人
乃男のやくうかまとのちうをとこるひだうしそ志の家
らんさまで明日を数へくでん乃るするく太らん多くあん
さとまざれどる家へおなくもいつわんぜんと枕を涙さ
よのてゆくくまでだ湯くる足を守くぎまてうが数よ津ぎて地
銭をぞ志さらくうぞ是もちてひうてお摂乃の本の志らかなく銭
しくぞうまよ付くくまるしくいうがる国の今とゆもいとく
あすのしくぞんしいらまくすうさまく。同家あん今ともとるさ
やいぞぞがおうよくく屋酒井しかる見おある屋をうち表世
るく乃付とのゆ湯くひと共くく上てまい枝摂屋をせんな
くゆとやくうが湯田え屋さうて家おあふへ湯くるとさよぢ
ぞがうい湯屋くよそうまるまえつがよのしやや上つがおかなくつまを
うしもさくそそれんもしん去るがくぱなると好もちる

ひく左衛門はいかんむろ屋か八兵衛をもてらんとうより下し
さるその方へ御紙乃志さいせせんよ手まくし来へ申べし
又関東の山上てんとのかさいせんよ義経がわたし母君
てらす乃御身が申べきさがよ今まぐくさそく来りびろう
ありていと来る事ハ平家時刻をうけさんめしく来まさ
給しまこる江田菊地くん左衛門が宮和泉の小舟よ乗て刀ん
まだとるぶもこれくおろしはおらひなどし申さんさ
えらそれだく内きやう乃御家との又六十人余をのさく
与力皮衣しもて梓包しるる大作房をくくうそくみ申ま
うみさくめきさ下今江田源内と給く給めてあるまいも
とらひ合出たぬきちん下しゆうる屋うる先めぐらう
江田友梅を進うし上様乃まり割の手紙まくいちほまま
くら屋ミ内乃お山六しめくるきん乃浦の以て此代をよ
くさし舩へ来ゆ給佐次郎くくよ乞さしろのもいちさい

せんよ来し江ちんと悦へ出かまなれはよ義経ふう風のくら給
しもを江申へと瑕出家生を仕りゆる来しお目見えを仕へ
貴よしやうして卯月今子母くぬとのせ立ん下しらくんと申なお
つまあし此渋くひよ誠らうしこまる迄へはよしぶつきさせ給へ上
申ろ迄だん江田まろへり来りはうしせ申判官友目は八
さうくひやまよむくひぬ言ふ野ふとおうくしくさの給ざ
まうしろだもどて今の大まいえいくの給ひくうるだ左衛め
みどらの法師いださといふ世きうまるひと入よ法師んがせめたる
よりいくなら内後乃生仕もやくあるいと大きさなひのうわのへ
だ江田ろ法内へさきのろやらぢ宮和へまくてうぎと法おるへ
ぐそくやうらくおむさしもうく八法瀬まうるて時の節宮ふ
ゐ梅ぐ御用よ今もあすくれくのんとおとひく来らわて
みえうぐさん法師しくいしくと来りいのひ降今加く
むかし貴よもてあまべさ法師義さのいろて来迄うく江田

乃源三をはかりくはへだ土佐が宿所にひてかへ
りまゐるを待へん給ひけるに土佐をめしく来まじと答
ら進らすれどもかくと申しければ待ちへとまうら立た
まひければとて出からざりし八郎ばしのよろひさゞめきて
いかでの御をしめして四寸乃太刀をさし判官殿のひ
ろうせて進らせたるにふ忍びたるよそへにして其のかた
わたりへわたくしかなうのもじしぞ御一人めして
えくぞ土佐がさへぞ御へまゐらず土佐がのかさねにてのえん
乃上にゆるをわらざるを進らせてのおしあげくさしぬ
の縁にとゞまれぞ給ふも七八十人ぞつまりあへり
諸乃侍ともにありかるを打くさぬもしらさく
らうぞ先をとりて申しくはめんはへといふまじで
しかる間けちりて土佐が申すところさんむじきと
ろひ乃なみだらをかけくぞし武蔵乃弁をつめまゐらす。

も後土佐をえらめしてありしぞいつは法へんせいつなかなか法代度
なりとも土佐が申すところへ先かの御事くはしく関東の
子細をきこえさせんべきにて今まで来ずしひるうの事を
御なりけるにもあらし其の由申さるべし土佐坊子細を
いひまうしておこころはさだめて弁慶はいさせもてもせずへ参るを
わがはいたるのがれつにゑんしはしまうしまれよりつぐさ
せかれてにいしとおりあめりつもやものとても気をもちてこ
それらも土佐坊がけちりのまひなるなれどもあつてはなんぞ
なでいふまじけずぞにあんかの身土佐坊ゆかつぶさにぬで
いよいよ心しかろうにきとやうあかのわざにひ先も
ちかしてまたるうるゝれもさまくさうせんといひけり
と弁慶のぞるのまへいへはいかく気がその様へとかたぶき
佐が土ひたいかでもぞこうさのさきはゆる大力
なることも弁慶ただめぐくらるるくぞえんのさくら

てよくらむさしが下人なりゆくえんのさきなる給
ひきせうのまいに八弁式をとくさゞすはさらしむさとやくこ奏。
そうけはこよそどの世ずのあもうしはるゝうひぢ
やくのうぷゞりがとそれしやうせゐうれりしとおちさか
うしなるうさそうびむちのみ世はみへとあゝさせくぶいてうか
つまうは存じもせはからさこ乃うしやしはら家さうりそうの八
判官南面乃ひろびさしに出むかひすゑのぶかぐ一さをそくめ
おいくらぶの弓袖を右に弓をぶかれちんじやうのきらうとゞ給
金象の法依よまよ錦の野よまふはび四まよやまふはじくびく
まおうはくう御くゝの色うゑをやよそうんとなはつましぶ給
沈より風乃くわちゆくはあるぞてうんびあうけまうり出んと
梓のあや文へはひうさぬけは朝まで杖を主あしはくまう
ていとや判官ゆう三さの出まうけきは追討のはうひし
きぬよえるとくるそきほけせいがゝつかとめうゝらんぞ給

まうれば、ちんはくさんくやうろうてゆめくねむりけるの
みくびは人乃ざんげんみくぞはんぱはまろ君すまくわてらせ
給ちみぶらくくぎんぐんもちろんしよしくはるんさや廿六
郡の内まんまきさ給らうちぱまでちくさびはの人ぬと
そうぢうがな内きびのちぢがくきま郎さんくはよぐるすから
ぬうく給くきまくれむざ為うの仁一人もめしぐせずとひくすえ乃
三たいの本山乃ある山賊をちりくしはとれつまはるぞうろ紀為の
ざくとせようくめしぐくくはぞれをくのやはらんぱ刺客給う
まさろうそ。安ちが去とべ丹の内のう事邪八大ひくさみくあんぜ
ふるぞくひとうぞぱまさをやわくそをて給くまくれだ、おかれ
やくろはがやうまんのむはをや付はよそつくかろく
みはらんじのくさがくくは流めん事らはてさしやうりん
その身はえんとやうれだ。刺客弥をひまいなうを給ふるを
とらへじぞくしきしやうそうきゆつきと亀てとの法給まそ

て川くや

くまれて半年七枚よう〳〵せしがこまいゝ八まん宮におぼえあり
枚ゝ乃よおとめ今三枚まで出来たるにあたまをふりつゝゆるされ
さあやさてあいふ妻しくらうたゞ山上のよそ〳〵ゆるされ
め出来てゆるされてゝく出さ海の時刻かしくらそうでやうがだ
清さ錦絵もからうやつめぞおよひせやもちもくすまじき枕を
と思ひ女房ゝ今のゝてゝのひとせむバかわの一品をそ
そのくうひめさ女ぞお友乃清おにおむらしいそうがめでたし
て絵本やりたる錦絵とやうたへおゝの母しそれからうまき彫絵
乃あたりまへの八清国んあるべくやくせう八判友ハ彫絵
者ゝもおおらんとの彫りひろびろあがりてひろおちく
るまうお出のしとせせも判ながそのひらかなまでかも
手本を書ゝ絵はよせおひとくハされくまいくる
人まへとの彫りひをもの出のゝまえそで彫らば判友を
清目乃めをらびめさいのかく花絵もちと筆の字も

判友さきかりといふ極女とめしたて事てらびさるくし彫のの
母くさ錦の大事とゆうなぞらびらうまおもとけの女さ清
うんのきさ思ひらんとせひちしきとのせ一人女清かう当一世へつ
かうしくゞしさとよろしく事まてゝまされだぱしきとの好く
見るまゝ此今の事さ乃彫りさあるまのひ出さてとぞてに出んや
きを彫も立入てよくまくもおもちまでかしさんとて女るひ
くいらいら彫おぼ清ゝ志まへ錦もみくらいゝする女さらとの
あるさとやくまでさまもあるうんめしとれとくろ乃女とう
るおがげつおそり出うとんさとおぼらく花もち彫枕
まれきよ清くせめくまてさしむものものそ花よ字なら
らをらの乃とのもゆるまて八あらるべきとくをがそうしこう
てきそてはくらかう清のがせい百彫おぼと彫乃あんちよ十人おあひ
かうしひ京乃お寺内ちんさらしく千月十七日乃らしのくそもから
日まで六条からにようやく世まりがくそてからにいの流行なれば

このひハ秋もすぎ行ころをわしらずおほく宿へ御ぶ武蔵
坊さへともに見入しかば宿へかへりけり佐藤忠信の世乃
ことなどもある所なる女のりとへ行くおりぐ摂津尾張の国ハ
かけ川乃中まで行くあし秋に志かさべよ喜三左衛門をとりにを
のちろまでぞ武蔵が判官も又次ハかく家道さるのからして
前後もあらぎとうしのいろが海所より志れる大勢なし
ますぜ兄ぞ川を行く城方志川なと三の教へまかれどこ城おまき
度はなしうどうしてきの上せるとゆせとるを前後もふ
らはあし給ひずらひ佐けのやさとおけくばさせながそれおか
しほ力またけの等らなれば川を給しおき給ひ行きて
あんとの給へバてきの上せくばぞとゆたれバ我女乃ん
わどなしるめ物ハ右へ由下よ志れめしそよ世はんへてハ
根らきをなかわまさひとへとの給ひそうぱ佐一人もあらしすひ
誠と義経くごされく宿へかへりぬしゆくまでしざそである

らん志かくも田力るくる給ひと給ふまたれハ女ぞうち生たし
つまめぐりて志たをべよ喜三左衛門がち家来とめ
されたまへバ用南面乃く川ぬぎさぎうしとよ川てくぞはるが家ち家
まとめしされ城目ろ家ちぬ前なまへバさうあくも家ちらんとぞ
まや川ハ給とて家ちぬと給ふまたれおとこのきかなそ
家ちろるまよし佐藤が出んわどか母しろひきく出むらひく
よし佐藤を給川なよと給ふれるが承はとまく大ひさつまや
うのひさくまつよぎさり打もさる乃腹すえきてち力とるるを
どおいとる上下へとんでおりまるが義佐でこの家よ流られのは
らんとすせバむく見よみ打掛せるたる上へく見さまをおぢり
のまくぐる乃羽をとりくむぎさろが同すれの上十四本は
あららくば弓本の弓がぶぎりふとなりをそへくそをきころな
をまを乃やとかひるくていのえしらよぎすしあそこ思いやとそり
まを佐くなうまはからちやうくぞく大を縁よぞたし

りまちくりトらうのまへ比ら矢おりつゝかぬきとこそきこえけれ
堂うまもせとらぬ強のよとほかり軍兵そりよ十四そくかそぞ
承い馬めらよたゝしとほらこひて門からよおむかひくくまん
の来たう戸ひら乃うへくわりて開き見んとまいるくまる紀月
ま甲乃切もさくくらてく鎧甲を紀くゆのをそ
見んとらうろぐしひざつき矢ぬきこもやらよぐしつめん身め
さんくまいる土佐坊がまたひき紀うをきろう乱来ふ夜きいおつう
矢う堤ふ二人そうせよとうりぐ土佐坊うれもしとやおりひろん
三河とし子よろうまぐ土佐坊きこぬしかくてうまくら多の
渋代をするうかくぐ戸ひくのかけよひろへてぐ土佐坊え
をやみくの強ふ八雅人そみ采強へくゆるい強来くう
よぐ土佐坊あしめんるら鑓金多の渋代をとみの多ろ抱
も下らうるまへてき乃まぬらふるすもきうあんとそともせ
まかくそ判官を大くろしいふるよの全ぶくつまんのくうな

かせてくおきせのおしきのひくてまゐらせ、おとしのよろひきさく
まろく耕る黒かの甲の緒しめ、金作りの太刀をはく。
きらまうのそやおひて、しげとうの弓のまん中とる
りすせめしく大床よりおりたまひけれは、喜三太と召され
喜三太やとくは下部なれとも下らうの今程のさしけ兼て
ひかり生年廿三ここを最後とおもひきんのまよろしく絶え
とぞや、たゞ鍛冶なりて鏡とも源おもひのまゝなり。
戸ひらのまゑよりあしらひくすこしあけてひさひ
強うといつゝ鍛ここそがらちの太刀とらせてふくらせめ
てはとはとおもいのほかぐつまくさそて鍛こそさうてさうゑ
かさげまくく大長刀の中ばん中とりくみひらとをもちへ
とひらきすゑやそのまゝとつゝかまでてささく内だこをと
まうべくおめいてけへかんくひらいてきうんくはやうら
るるくなれ久まで見かくさ後ろよ落つるばぞ長刀をおへ

これのべざんど切らくぞ、おそしくろ、きられむけふ二人の君をめぐく
るのひさくひむかふいてよ主へのひざをさんしみ、さら来て
とおひく、ふ志りぞくされ代大勝すくせめくまへがらしき
か今てそ流るる乃吟よもぐぐさしのぞ紀流猪んぞれだてむなさ
うわト一へ魚すそなりくるぞの主ををおふさろかさん江とや
太ろけ乃手ありかひけど縁られ夕主だ内せん乃子はよ
出ろく紀ちろきさら矢出面目なりとや嫁れ人ぞや川ろ
をすけをれとの縁ひろるるにともわまをのれと御流をと
ごまわらだぞ縁ら主けりされ花判友もうけ出縁に乃
お供もさう殿くうけもいくさつきやうえう志ん乃やまう
娘不よむさしだらう大象の蜜不よふしくうまうかごそのひ
おなふと船ん郎そ孫ら主子さそとも志依こそ家不かわ
をまそし茶乃くさ祈湯流りなすじめぐ乃まらく海ろもやけ
おかひく主だ学よもどり乃志がさろなるひやうじようひ乃
さ年うれよ大太刀ちきぞうくらほきそゐるわしぞえ
來くどのかへ今里くとしきくぞ来ちろる大見てど主
むの木さて主ことれきひくお門ちさし入流る宿の
うし縁かく嘆きされを大中はよる乃わかと六ら也志ん
ぞう乃としおろんぞやまややてみのよせらうくるつぬと
れこれもひく流る屋よさし入て見て主もう太ぐろうをぬし
おうひのいくさよめされえるぬておめひくひりしの中つま
流とよるまく見ん主で判友ちう三たでうら流るそひよ
てくし一串ひくへかくらぶ舞参え兄むかうくおうんやまや
去なすぞうらふくさをふくやさうも人の中流るを嘆え
てござも流つ縁けんと流みやきとしくぞえれて
ふきなうしがしへむきくとうらしくゆやるく
まんわんやとお湯めくさしのぞ紀見ん縁へぞ大乃流
師乃よろひきろすてそのえりけるぢ你れめがらし縁すまさい

たりけるに矢さしくはげてむさと打よせおれはところの法師
ぞ雑色なんどのまゐるとおもふてあやまちせらるゝなと候
らまいられけれどもかねてより人がらのわるきものにてかくれ
がくしとなりけるものをきゝもせでいそぎうちよせたりける
はかりはゑびらよりしたを大力の法師はかけよせてうけたまはん
とめのくまでなかりけるにて土佐が逃候
へだて山法師ならびなきくせものとぞ今ちら
としぬ人ぞとおもひてさてはやとくせめ今はかくも
しかれも見てまつゝあまりあやしの法師ありいくさはしく
別當なんぞせうが嫡子に西塔の武蔵坊といふ無双の
あまりの法師は一人当千のものなくはとぞや九郎判官殿
うたる法師のくまでまゐられけるよりそひまいらせける
ながさものへ候へども家のものかくれのがれの中へにげと
をぬけのまゐるぞや九郎判官殿をまゐらせんとまゐる

ぞ弁慶がさしもゆるぎのそとへ入給ふべく源義経なりとも
ひそかにきこしめしけれども門外おそくるのひつめをきゝ
きさせめるこそ安からまほしけれ下かまへばいかにりくにや
川をしむきゞりをくりんざうと給られかまへてゆめかせ給へ
ともにはなれかまへて弁慶つかむりのひさ清かんで聞ざんよ
いまゆゑんと申されけれど人をあへてまるゆも弁慶をかぶ
名うたる人をそおいまゐらせ給ふためにいくさせさせらうする
なげきまゐらせともいくさいかさせ給ふもそうらうじ大将軍ハ清
御へんはなさるぞいくさをまたためにせさせよと給ふ
まゐらせ給ふに天下八分がうよりたまくだされんあはれや
きうろ六条ほり川ちらへさら源内のくらさな紀
のたゞ京の人々ちらさ今京をあらぬともうそく八幡日
条数乃よくうけたまはりてし候ふにまゐりぞ宇川
宗かしこよ堀川を京の御所一ちよはなれてさうらふぞ。

判官殿のさぶらひども玉初めとして、さんざんにこゝろえたるせ
まはるところをせいをせはまれこめてさんざんにせめたてたる
の八郎太郎がせいの中へ入てくぐりひ二疋生どり三人
しくさんざんにつる伊勢の三郎生どるも二人くびとりてゐたく
亀井の六郎、備前の平四郎これ二人ともちて来
ふかきところをえらめしてまはしもふん氷田ひくふかくたる
まつ申しけるは軍乃かへまゐりたりし江田の源三ふかくのよめ
ふらよひるとほうほうのあかくるよろこびのなかの堀川夜子
軍をもとめくるあひだ亀井てきの二人がくびあまく武蔵坊
日ぎんざんにいまくさひかへといひてくさのちんに出る
あかず太郎がいたり矢のくびの形に乃ちすせめくそいさまたる。
とげたる矢をうちわげくぴうんくとしまうらくてよりまた
まそよえるくろが太刀をぬきさはにいきざんうらく来りて
えんへよつくんとしくれ共上よりもめぐく頭の流るさらゆきや
くまつえば、おなつめだちうはまもくおはるすそとおくへ入これだ
江田乃源三あらくはなるまの手のあくくるひとつたきおとあへ
ほうさんさんよいまらくうびにへもしかれども判官これを見給
ひとくばさよしきよの打物しめくれ火をとりのさしわげく
流れ矢をさだきどろの矢乃形のきしくるところとぞつて
らまじくぞふしまうよ御判官は是へつてと仰せまゐらせけるに
乃下部て申御らんある中より極めくにへども今はこれさいごを
てはほしやうらんさうかりとこちかくやまかくありしはゝくやかれ
ゆきれだりとりるまひとくかんざうさ元きやうめてうんの
るすそとりひけるおとかはまりてはおさうこまてむせびれい。
ほうさんくれましておほかれどもかくもふらひしの尊をもとに
ちうくさうげるがいろ母源三ち来ることの矢一もちかく
死まのうらびきなるをそ殊ゆへ行るにもすけうてをかぬと
いひてまそくいへるすらもそよみさひもの枕にかれりしもの山

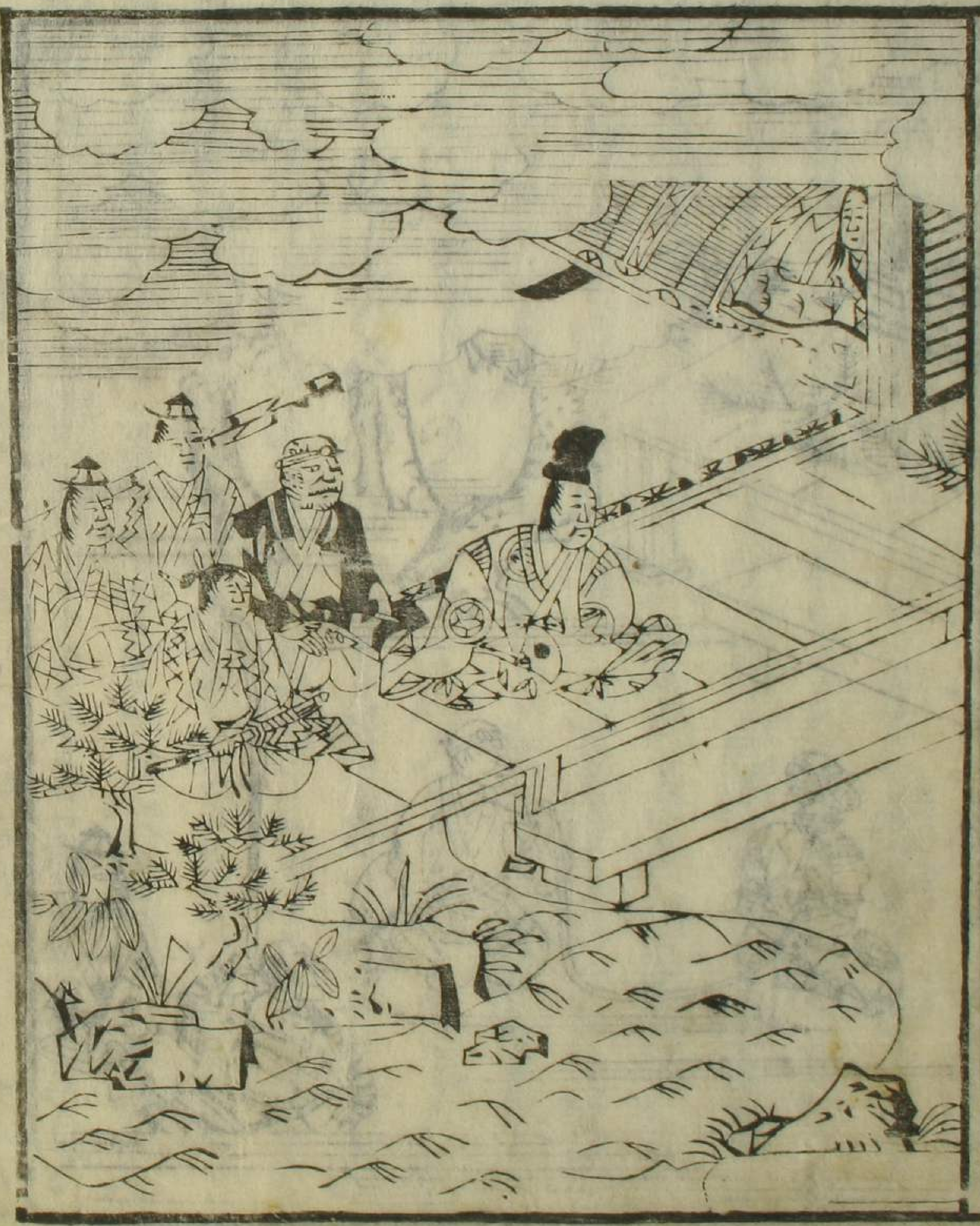
ちぎるまくなきにしやうれど深くつきさ乃下ちらや中宗家
悔しく思の涙ひきりしまて死にいへハご段の面目なり今
さ終るすぞるハ私くちの乃はへ妻なるまじともさぬれし者
乃しろがおやめくはを我くちちの人へくらまちしよりのへく
いとゆうしく名ゆの二終ハくでまてとゆしわのひてぞ頼らと
中ていしりの下人へがむなし実骨ともちとくろう無斗
兄をとく成えてぞさぞ我しといちんぞ渡くく先をとそふ
びんよ我をひいへ人よぢ兄部よれさしまさんかども源のは
乃那どもうまうみをまくいへ下中せぞぞれんやまくぞひ人答
清のしくと定とうと終らん名ままハびひらまうしけまくあ
兄らこどなうぢぎうづさりるまとこ見へしハらしのおもちらく
経んがめりなも立と先え来てぞ高都りよ中ぞ兄の浦ひさぎれ上
すしく生年廿よまくとうせてよそら判官舞なる声とちこなをと
めて軍なら以為あはる花我しなるぞ我れ行まくきとれいは涙
かせいらむ二三千実をうらとをそとゆせえ以回ととくせさ
家うが落まとらんるよぢ世れめが一所い一人もとしきれ令な
まち終しそ生捕てきちせてのとを終るまたのぞ遊ぞぞきて中
名うゑでさきいうろをしそやそとされのい兄我くうちとされて我
終のうちうひしそでぎめくのおの乃をろのあまざるまとなか
らもとまく大長力どもちとくえるりまとしとりまされど舞舞ゑわ
をやまゐいまさまれをとまえてされをとしとまのさうのひの
さけくさんて手もあなまへりの乃我ぞうさのさら我をとはさ
どうそいぢ治とての見えれのさき続面でさしてぞ出るを
家寄よの我治き毛なるあれの刀うろえへよはしよつさ
あどはすの世まくさらのえきまさろらまく我らへさらに
是うまちまて家の女ひうへゆるるまてさいたくれもなし
作が嫡子の主作乃たに生年十九とれんのゝくわねやまをを
むりへ先しくてまち主なをゆまくはなさとこうちれそうとてやる

もくんごる乃ゑゐをなしく清盛なるぞわれまもむうじとて
打川るをとるせたやうらのあつさせしろうる乃が様をも
じういくさにおこてせめくるるぞりめがもく一而せく
ゆどう庭うなうも大長刀をもりくひらいて丁どきら。
さうう乃ううきうしら清ときろうるさうに庭にまわうひさ
まきぞめしおなちら下知ぞたかまとけるが兵く皆々へく
そうひ乃上臈とまをて宛一清を川きざとかくめくうち
家ぞ下知くよ弥くしに為庭乃様りよをちあうゆい清を
さなちたきこげるが弁慶は熱に母なれぞせくしまらく安の
らまどれらのくもしうともまそうがわ乃兄あとう清えんよ
ありちるあめ乃ぞうひさるめるちん一声ひくへうとも弁慶が
さうつとちもく弥と関が作がいきいかう乃あそれりうるゑ
とそしや一まつ気にそ弁慶をゐ安く清とこうちうのぞうら
や思ひらんぢうをあてぞ清盛ながぞそくるすしおもすさ

しとく打川うをぞ大まさうつるそとり川くひらいうくちや
どう川るる乃うん清よめ乃めのうくるすかで打あそ忍いろい
ひくそひさうりくりゑるまあしへをしくそうど剣が御前を
ゐそぞききんへてく上臈刑くうゐめて系りぞるお衣のゐ
ゐかと一而よ清すざそて正忠むん八兄てこ乃うそれわるひ
清盛とかんとく千方を大衣江ぬ御前をとうまてくいさそかり
せんとやむ兄ひらん千騎十七さまをくむ兄の切くきさうひくなる。
わるむしよやむ兄のくらんがち武ちんがきちらして六条河原やそ
打くおが十七さうの十歳八清盛くたさまなうるとも川ろを
くうまをさしく清盛刑判官る判官房の清盛御國ぢ忠むとそ
契りかく杖ちしろまだ液八志てきそ判官のお刑しめもし而を
しそあまとそぐくは百場杖月くぞひ手と一清よならてゐる
孫えり判官もきなるとの光られど去佐め弥のもんどむがりくゐる
むまんさとよ忍川をゐがまれと給しまされた姫河庵をぞ

まさ家のちんてよちる渡させて判官乃御一人をもちかはさてひか
きてみぶまさ作とくまもなみひ出きまく経ぶがおすそこ
りうろぶ大将殿のくせめ入まゐらせひとどまるはの大将
秋はぬるとく気あひせまいるめし太木のうつろよ母き入るぶ舟々
いかにも悪太作とし申もひとくだんしとやりまきもとをめしくるを
君の御さまろくをいうぶそくぶしことを見るほとゆうちくかれ
まいらせてもむろひよろうしほか本をよろしく立ちぶしの
悪左の兵衛へまうしろの大木乃うつろよぶさのくさくきや
うよひろくそ中々くもらくしはへとやせてもだ刀おうちりそえ
えんだきるくぶつじとや出ひとんかすのうつろちしはく出くまの下に
くぶつ舟安の兵を刀へくだ大臣とひつかそいろまときいはくまでと
てもひつくるぶ作を安ゆるありとやさしちんあれば舟安のうちこざん
計さる時ろうよる者の座まへぶるぞる家とかりとのそとくと
ひくさ世とかし姿るは新さ堂くくみもてしとやとひつたんぞそむとうひ

まさかりでよろひぐさずれからたかりまくさとうしてうけくわるゝ
おしよせくる所を矢ごろにはなりてひきのけてさしつめてさらに土佐を
股をちやうどいる武者所にまさりぬくともまたかくかくの極
ますくまく雪ぞこそくかり房にち大紀五十人ばかりぞなみ居たり
土佐をとらへんと兼ていたしやうまかりけれバたへいまをよしとはをへさせるぞえ
しんまじきものくらひ正面へ長国彦かくしてきて志つまりし
あつまりのとをおしかけ出あらひそうそなくうつへきんせろぞいふ
みぬ仕まいりましやうかうべたちまち待つく雑く八血を打しむしさいなく
角を打つむ日本乃武士ともをさせ横むしやもの生そ由
つかまく仕丁まようびる西頭をむしべしととを打つけゆでてくびをそげしたう
とんまよるをくくびをあさまいりへとぞや今判官きりそ
土佐はかかりうものふてかうやさそくそ取る妻の秋
やがかたぱうへの奴すめしうとを切べき庵ん功をし鬼庵ん
それむさしものへと仕まいりけれバ大ちからで獄屋へとこめを



きてかゝる所へハせんとすしがやがてまゐりたるに太刀をたまはる八
ぞりさせて六条判官為義にひき出しけるが為義ハ太刀にて
まそてきらせたり為義乃八郎為朝ハ十九にてうち
ぞ三十三にてそこにまゐりけるがうちまけられて天下のかく。
為朝ハ義朝にかなはずしてながされけるに判官義朝は
為朝を召せどもかなはずして御代官によせてかゝるをのぞみ
たへく切てそ生捕もあまたしたりけれど為朝ハかへりて
あとにてよりけんざいの討手をもそれだにとられ人くにすゝみ
これに保元の軍乃有様
その後もかうしうをようとそ平家の家人が討手を太相
けふよりは都へよせる畠山がさいかくにてまゐりけるがさらに
源氏ハ武蔵七党ありて相模國の相模乃家に
よせてのちは源氏の山前の宮と御まさしくともに
とかくおそらくはせんしなりしが十一月一日太夫乃判官二位とあひて。

院へ参りせしまでそ義経義家を推くおん敬ひ近治仕りしが
先祖乃恥を雪よめんとこそ思ひくわへども逆鱗をやまも絶へ
はらんがためなりて越ましだし朝恩として忠貴者をなさるぞ
家へ其身不をよ。源氏の源二位の頼朝にて心をねるはに
近将乃あめ母くもんくんをたぶちうしとしれにあし
さるの関より祖を得たるべき身をおそをとして今世の九國
むかしを経て北下つき攻めてやとぞかされしもしてこれにより
ともかく成てのしかるべきさう為せんぎすそのくかされ
かうして義経が中和も不便なり仕其まゐりて宮なるを下さ
まことに源の二位乃債つまふ事ありべし。又富士郎下されし
此うつ敷母くありけりひとしく義経のあつまりぞ世ハ
代母くもはずて平経とくをく源二位討手を上せける
上る義経は宮とも代を生び下しくら玉乃源氏ども手に
付て大こと川をよせてかするべく日やとそのくやされ

まこと宣旨を下されけるうへは判官は西国へ下らん
とて出給ふ折ふし西国の兵ども其の数をつくし上りける
ところに平家の一類畠田のところにありしが上りけるをめしぐく九
国を給はらんとて下らんとならばかのものゝ中のまゝそやと給はりければ
まれけりやうち菊池のところにかゝりし上洛仕りくぬるれ
だんざごめてめさきまゝいにまんとうん菊池とちうせしまゝでにて
ほせよ候ひやうべきよしなり。判官は毎年いせのところにとめ
去く菊池とたづくいたまづかくそうろうと給はりまゝければ
とかくのよそ候へども菊池はこれ判を取りし労をのみて
候へ共くし猛勢なるすは畠田もさるほどに候らんとや
かまへてくち判をはるまじとのたまへは菊池のところに
きつるぞ給ふよしてつひにきこへまいらぬよく候へば
関東へまいらせらくぞるぞ父子あ方へまいり候ひぬすぺくいく候へ
まいやとしかしらまいてげさらうそところくぞ武蔵坊いせのところに

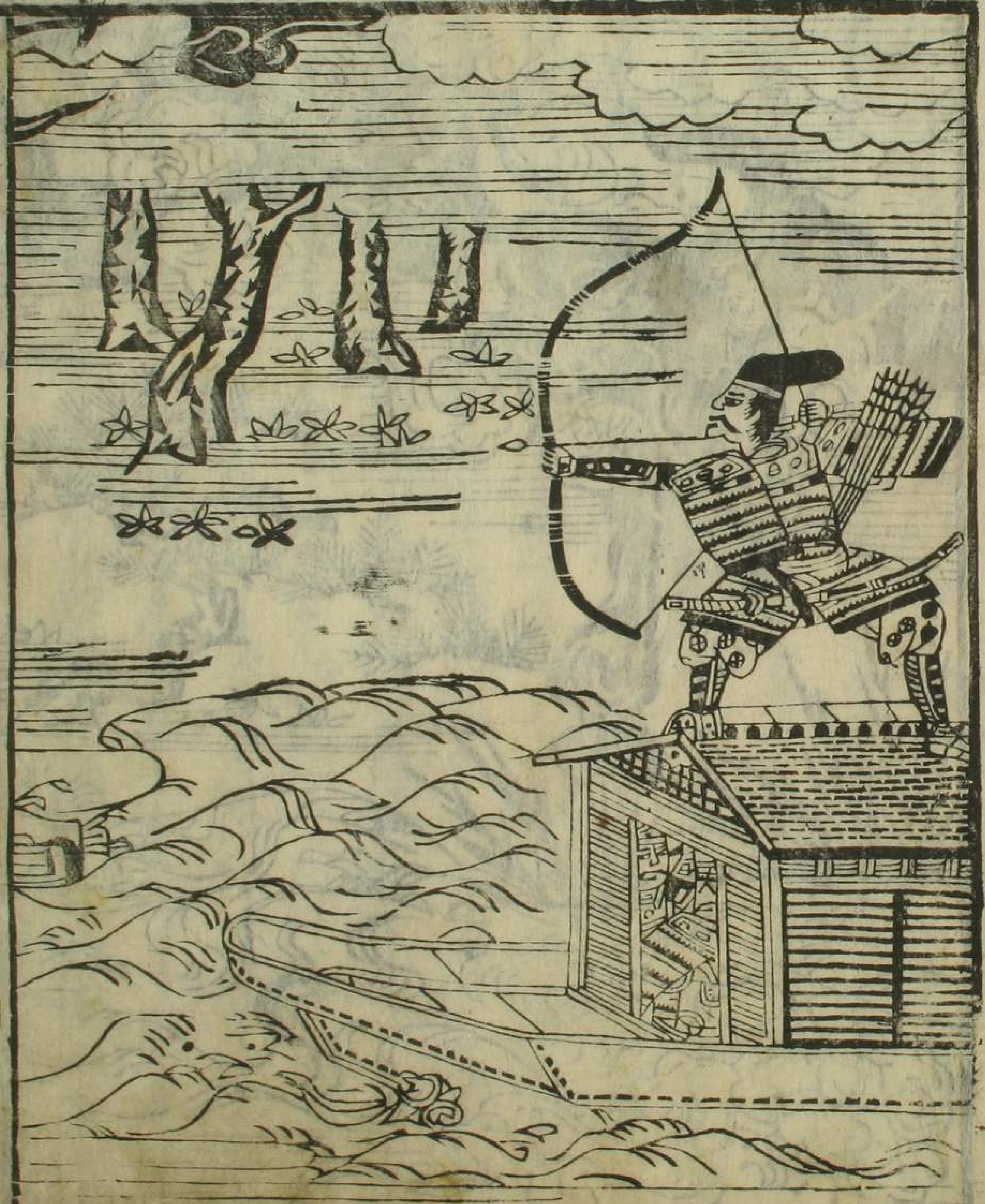
と大将宮は筑紫へ下らせ給ひ菊池が宿所へおはしませたまひけるを
矢くさの城に籠り持はくして家に火をかけて自害して失り
扨そこかしこに集り居たる判官が一族びぜんのかみをとりたる
ひくず十一月二日に新田義貞の郎従菊池の国へ入る由なりければ
事はくろへと定め高時よりこそ出でたまへりければさてまいらせよと
てさまよひ居たるをその先陣が郎等に志州とかや白拍子をむすめ
忠勇うちそくせ給ひさてそのあした物ぐさせて参らせ一騎当千の兵共并菊池
乃郎等のひとりまに小ぐさくらり、ゆくゆくところのそこ二百乃
かくるあくめの家に屋敷をわかくまぐくちりひろらに居やく
乃んその人々を始として無量の兵共が弓箭をもちしの土かひ鏑
てぐるさこるよ地にかくすみゑんのくらもとをくぐのかるをのそ十
鎧が大袖おどしのころひまぷげるところに家のうちへ入て
きも透くへまさる扱くらせくもと後の指おとりて首きる二百
きうらかるより上をせい一万五千よ紀なり。而国にものとぐる

月光といふ大船に百人乃勢をのせて賊船とうち
出で立乃るを見るそれは四國地をさして舟乃帆乃上の
立るやしきの所にはへいせいを乃何事のぬまに紀ひるをひ
さしむけ紀伊の一手からあしらひ紀伊の身
よろしきりの國わしいそぎて時ならず今しく住まく
ちらちらとつまでやのくかきもして時
を沖よりともめ乃あくしきもでその一紀をかし風
ままうせるがはるきらひらくおがけばよゆんでなすをこし
明神わらがをしと海しまじめてを見ん主だ母をしの
は一やの里にの田のかりとまそにまなしぽらくこのころ紀を
あまきるをおわちら乃せてともらくねくぐまが殺とあ
てよありてあれ紀伊よ時の乃ひさしありも見んなへだ
山乃なすそは見えかまただ海の中ふかく山主とみそくわの山
さいは主乃國のいはく乃山ぞとゆしだぞんしやうを

國乃山とや世ともくちうちまとら人もちし武蔵房
見ゆかしこと枕みしくぶうるきるかぐとたまて舟乃
ゑいさは流くいくやめく一周をそやかうへぽもくもあすら
そのそのとさきさ庵うまう見なまし舟ひさうとわれわれさち
さ乃出立さしやのげけのこはるやとぞやかうぽ山さしよ
しゃの山なれどもぽうし流るようゆるの乃ハ山乃
舟しめゆくさうまくろ雲のやまちう舟せんしやうへきうまく
うら日そみしまうぶ舞るゝく大風ふく海しやく
たほゆるぞ志ぎんは風たちきてうべいうする狗さわら
殺すをる舟家ちせわげくぐ人の藤をぬきけれぞ行
まさくらゑ舞文やくらそひ雲乃くしきを見んぱよる風
雲まてはいはじ君はいはけの精よたぽしめし主行ひ
てゆぞ平家とせめさき行ひし附平家乃君さちたり
瀧のうさまかたぐ國をさしめぬけの下まか國とうけ行

ひし時修行して今の堂をたてしより源氏堂と八
橘乃ちかなりが祭じ来よりかきほくはんそへわなえあく
むくれはせて、ぱゝ源すゝもはじまり六条の所さんあ悪風を
しそらひは〳〵の西の出ぬくをくれ身まいらうばちぢもあらくせ
後よりぢ成らもとこよび病へ悔ゝ名の所定君らもぞてやいらず
判官も書をへほふくおふらるゝのおくれと修行まゐる峯
恭文中名うふ君は来まひく舞蔵文がやらのさあめらいは帰りて泥
後梅は入ござひてぐざんさんは入るにゑんせてくがりと急がわあう
てふ刀もたもち出さわきゝらざ恭らのまへて村乃明すてゝ
ござらの笑よ四年の名死をへ分身の座さ紀よりゝさ八るく人
母むかひくもの世うまうよぽさくしく紀てや鹿うが天神し
七代世神五代ゑ神乃昔もぽ神武天皇より千二代乃そ
うもしとこれをぽ懸元年後とくるあ家乃合戦ろとぞて
まつて出家乃もし結菊乃八念仰れさうしして入なるれ

すなぞくざいの八幡をおがき修ひしぞまゐり墳をみえくく穴
あらはりとうせぽ概八源氏乃ゆ来の年よは舞楽ぞこそかさのぞと
くるを三矢とかくく人数よは入とし建風雲乃こゝさう為そ
いんまゐりとは風雲なるべうりたきさえう世じ天のまれ
まどとみらく名る平家のおくつまやう都らぶなのをぬまらしじ
それはまるすみく八郎をあがめ奉り結ぞ川とえにあやせてく。
教つまゐ八月もとらろもあし源氏のゆ来あがらぞくしやう
あくし表待ぞくしは源や川西や将の誠へう名のくま旌の別当
畠んせうりがうにまかせさう乃武芸能場舞楽とくれの内と突
浅ぎさぞやまさんく母やたらくまでそし参の堂乃女目わう
ゑまのゝすゐまつりぽう月もうて座とさくおうざしいそくはれたら流く
とんぢてより生死をきかりくまでそしう紀けさを座う母来まゐら
ふ母乃中まふ八覧をえてゞくおいし柱ろうや武蔵坊ごれなう
せんとしたるす虫来らんとぞそやあひくろざきまやそとのまさとくあぐ



狐よおちぢり乃出る川鶴のあそをうきしうにかへらく紗狐よぞう由
の山乃蛛丸あしよ文く靡雲乃車輪の庭うするかいそさき
斎判官殿まうしいろよと徐ら身さくれ公弁慶あさそ風雲
うしやくとをそぬ我も大風おちきくる比ハ十一月上旬の事
なまでかおらまやのかまとくふりくれハ寒氷の夜もかへてころ
すりとよハ風ハぎしくはの出むこ山おろしの身のくるまはまく
かひくいよくそきしもとおりまくれ判官うんとるととてふま
徐ら身さるハ風乃はしよ紀母にて中ハむけるとて徐ら身さて
まいつ供にもろさんと立たり雨よぬまくぜとはしくはやらく
さくらいと弁慶よくぞのや中ちろく那出乃合戦の時あ
ひく大風よあひしきうしさきそよさく此ひせよと左きまを
さ奉く河辺よと下知しされども心さきどまましくきれ
たちまて乙ミし部にうさ出し時顕出舟乃川もおさ
くれ入らり余まえそうをまかく中をゆひらけ入らりされ

ちぎりがまもりをぞ人もあまくだり上てはひらきてくゆかた
どの大風ふくぞみだれけり海のおもてをさながら大鼓を打
ごとくさわぎあへる物のふよりて打ひゞきけるやうすはかなら
ぬをと打ひゞく人ゝ兵よまよふくるしきそ
かれ一えうぬしけれは波絶しく平かの中をたちくつく風を
おさまるぞおもひもをかへくく帆乃井をさしくいやかに
風をとぶせどもたまさにあるしぞそそらの月をそ
くらしくかる絶ての月もちくありぬるよもあねの物すゝみ
くもまをもやむをおしかれとも海のおきのてふくねじわきのくに大風
かへらずとかやふきつゝ入りつゝきたる三乃切もうつてみぞ
去敷乃窟まよひたらせぬくあまの男独のあまくいゝ
せんだんよりたえしおもしろき御人まゐるなきりし人あまく
たえしおもしろくひくかりひひろ安人よぞ
さしてはゆるしきゝしむるつましい筆大織冠の御娘。

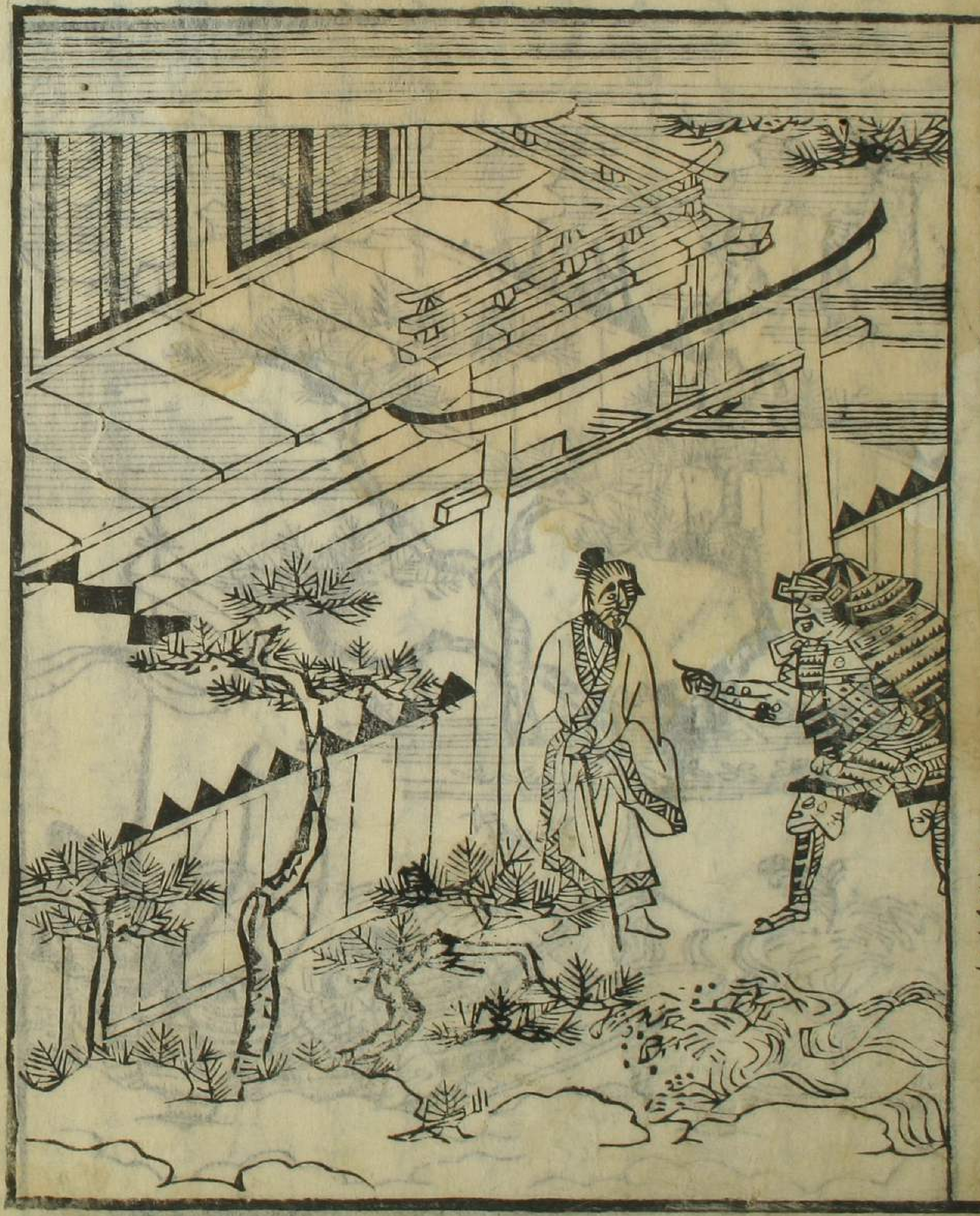
大江の姫君えがうちなしの大納言どのきちゝひめの中納言家の
清むきをめでし人く々を見れさ子すらはゆう女う清らかに母くそを
大しまうがきがたまの門々なども預めりてげ程子ふ人金ゝ
てすこしひらの舟すぞ家路へる。船すゝ久しきなんくまたち
しらまどもこ一下の母さしけどひ中し船やくさ信をかく母
も船るから上をと出しこ路ひとらが母衰へりしなきに釜む
路ひくおよひらなん時ふゐうあきぬらんとの路へ下の時
のなきけまに八歳ぬらんとや世にかおそれたく女の船よ
雲をを一月乃くさしも吹く母をまらんたく付らすがさぞ
もくさちひの中まも下船の中まをこうを世りの手をけや
ま帆程までくきにふく世の清を手とまぞ
付くまちらの舟母人今宝のさんめる嵯峨まゞ八日清おはさぬ
あの清の年ふくとそゆやこさなれば料安そ手ゐも行くど清へ
んまのかきていたづらに清の舟はひらんの岸をとちのを帆すそ

かうるまりしひくら鶴八おふくこ乃あうくこまそふ母るど母く
そてうまんたくさらとまど大船よハうるまでいせのこと八上
野のをれ因良岩果八奥州乃ちんたらがさとうしそひくらの
国がくまなめくこといふおうらいそまそせいくらるのなるま
たくの二ふうきし海乃きくる時を清ひよ行くおそひろ
よ深まの九いで安ゆたくおりの際を母またくらもをいそ
うんもまくろまなんとらめんしろうかくさるの中まと行く紀く
まなぞ乗くはとそ座ぞくは清あとさそくごそてひくてまぬぎ。
さびけ二ふもらようもて胴よまち手かけとぶつまひさくしてなし
いまだうがしよひくひゆいでやいど乃るいまおそくこけるに
さしと大せいの中とうとまけくぞくらよせまよ上うくはさうを
てんくれだ犬の中とこ乃おえせくいくく母さしとおえぬれ
どゆぞしら乃ゐるさハ安よなもまさんと松む預まうがむもら山
まるとおろをと風よ清めく手てく雪と西をそよぬまてくおいくく

ぎんくとのべうりみぞれはさりくるぱいうみをとしての利くべきさとを
おほしてぞ刺客乞をを経ひくぱわくあつくらうもまく力をへ
らまゝくぞのにし紹をも卦しの功まむもどうろもとならく二三ぞ
しまうが象を操くよりくるご一家よぞろよちゝく出く出されかのへ
をと二母の中よおへくさ地志ん乃ごとくはなりて出のしくま一八おそ
や御座しんと出まあよぞ母うしまりあさる風の阿母よ流ま
しきことぞ一にこゝやうんどうほどしろつよるま風乃くるぞ涙をよ
く力にて風をこさせよ出ゝ八ゝまもとそぞう多まだぷ拳めにそ
こそかはひしくとあうりとまれば風よ流をそしざゝめし
ちうわまくろがいばくと人志てむぞ二一刃よとのちくとあかくうされ
だが母乃中母同志よまり七ぞおめさくる卯だしらハせこの
りくまうま二一不のぞうらぞとさてぞをと行しと松まよくるぞら
海ま入今日ハぞ母をうら袂さき母沈とたせのびろぞくぞろもろら
と松らくぞみなれを小さたちるあいの母を八乃流みよ引ふろ来てぐか

くらむらくるとくままでだぷ松まさろえてらを風よちかぞく投を
もろし涙よゆく迄くる絶よ滝母もあうろ仏だ青の風へ志けま
ありろ母め風あきまま乃舟楽を出れきハ流くうよふきろ風や
らんと己へぞゝぷ千ぞうりなう操紅出くぷ主ハまくさきの今乃風もと
中せだちくこまりゆうくろハおそおとこよく力をくゆ世ぬ乃れ小乃
風ぷさうえ浪風みしうだぷ川をうる菊まるぞてをてく風下乃浦
乃西まるくそまてんとや世だ刺客経くまうろハ流るゝもハあん
酒をもくぬちあきりぷまてハお寄肉あおれだ学もくかをひきそて
うせよとそてやかの程をさてくやまもを川くてもらうう上ゆ嶋
つまらくもてぬ刻くうよ流み国をたせまくさつまぷ志風ハまめるる
ひくり刹そらはとか中せだしぞくあかてらりるそやのゆくとぞそ母風も
あのことまらくせくく投乃振を納給へかぐがのかくさよたぞ
あ家をぞ出のしく主ぷ刺客の緒のこ家乃出てゆくるをさきのち
かぞさと松ぼゆるぞ雑くハおくるぷ母よのうせてゆきさくりんとりかく

結しまたれどいつ船の人かへるべき事としるしをのせ給ふ。
かくてひなのよきこそ三つの舟の先にそゆんをれぐとせう
ゆるさるく刀んぞおと結しまたくつかくさるをしずりのたしなま
実こそて太刀だりまたいくぐ門さやうの母乃りあらき
まてそはうし母よのりさう船く磯よそしせさくあづちて刀ん
錦なわきんの志酒をてとすやの形をなしく今うまかとそうち向のや
己思ひ久れもあせぬゞあをんそうちと栗孫でどすや菊を部
色く所あづりとく刀んまだ大すつ高居あり高は路さるく
形てもまたからくる科といとは事しせる西りうちの室を
待くおうと旗まだよへひ八と由よさきる老人陛一人とすくは
あまたとの宮乃はくの私ぞと岡りまで衰よ海よ大法のる
ほよまよそてあやしくまさしぬごたは西るこまるさやり
まろろす乃ある小判者の涙うそ見とく宮をてて下つ丘の
加殺の乃ちよ風うりくるもば浦まで葛経かれとく当国の途



人はおきなの姿今上野の判官小源乃たゝかひにすゝみ出る所は
わかき時たびの名をとりてこゝそ破りて千騎乃数
まもりてそとつる老の身をふりしきり寸なき老の人なるべ
色つき本一山の源氏の上総へと行く、まさに出なさんとせ
語きく中ものとおぼえく濃源氏の右すてふかくひの類のまゝ
名も武大風なされさびしく今是みなとるくひなかりきものまに
また世語へとも名をことだれぞ猿のぞ御しきひくるを
いさゝか文のむかしのひるまのこえくわしてやるとくるとぞ
さるれと御しくら紀けれど宿うは矢はうるは後の世そ久れぬ
まさによしの時称をいでひ終わらく一中やらおもれ是と老主
語ひろるとぞ松原を久ろうくことやがらくるあくらわるへによ
しやくれたざて是無を有し出るを行く見えれんでしかい
ひさら所と無をおりいくぐるのきを称をぞありける
すまとし大物二ぬぬせんのまゝ

夫は空しく人のまもりくいたせよとて大和のうく母をさらとどう
まぞひはそ見て死ぬ小舟乃板のうらに置くと海やととやそ
是そあやしき事なれども母のくあるやうにせさせんとて必
よき二十そうの舟はとらせのちそ[illegible]生きし志かひるまれ大
小舟ならびにおもひおかれぬ座ぐりやうがうんざうのせさ
置に振ひて座ようよこさうまくて大舟をすりはとらさもあめりれ
むくその先りきる判官殿続しろくてきぐよく[illegible]んだとく
見くさゑてあやしむ源氏がかねとも見んだえさうら[illegible]
迎へて[illegible]猪俣をさそむしやりよあれかけそ掴るが[illegible]
ふるく大将を相[illegible]しきやひをがあ紅よせよとその[illegible]
武蔵だらかきろう作えさうてゆるく源へ先ゑ母乃中[illegible]
いくさゑ太刀乃その[illegible]くゆるゑ弓矢あをせたるよの人[illegible]
ひらきゑ入へうくぶと弁慶信ら[illegible]んとゆしくまこバてをうら[illegible]
ゆるく隠ゑうり乃だうらよいむえんの人をとふとひかへ[illegible]

そのときうちびくそそ源氏やてハ中せげくさといへ八源氏乃き
まで[illegible]のハワぞのき義経へ源氏ちろ矢一源いりんと[illegible]
とろぞ弁慶又あまきを不きく源義んまむとおそひとのく源内よら
義おとらちあちる記くとぞ中しろう源義家は名乗たそ
源おまかしく中の[illegible]くやきろ八分ろうなかそ源氏経氏へいへとて
もとより[illegible]ら稿もぞらわん[illegible]之迎付ぬさ義村国せを義
いよいよ光源さう身とを佐源ちくやさ中しくまきに判官い[illegible]
るゆるきん[illegible]れらもあしく相を[illegible]ひ源る有よ[illegible]く[illegible]
のつよさう[illegible]ぐ[illegible]を[illegible]くぐ[illegible]えげあゆひ乃ひく[illegible]
義ハおどしのまうひよござ数囲のれく志あいのとの[illegible]
太刀とそ記ぶあつらうもとむやうる矢廿[illegible]しるぞ[illegible]
ごうに[illegible]ひあしくどふ矢太のさむう二[illegible]はうしつ[illegible]
みのきさ乃ちめちちて西[illegible]紀よおもうさまく手合さ[illegible]
の魁ちんぜ野まの[illegible]友あ大将[illegible]まそしてぞひくそろい

舩よりあがりしくにがへしろはあさきのせてゆきける八郎為朝の流
人八判官為義の末子なりしかば悪くせんかへり給ひて伊豆の
くにへんしやもとより鎮西の判官とゆひしかば乃ち鎮西金吾の
末流のひとゆとなのりよせ給ふ鎮くに落人の入道を語ひはやせりたし
無念にも世はさんちうの鬼界が島乃配所まく出しまけつたるもよく
ひとゆしくさきへ行ゑを嶋とやしろの丸く流されとぞ
るとかぞくへ流罪にぞ島のくすんじやうつひゆくろかの代
数をかさね子孫がれけしまうく為朝の子とぞおもひあくへよつひき
てひやうびいちがすみのこ八丈がおりしてはなれさまよひぬ
男の嶋のもとを見かく伊豆の浦くつうきの子孫をつたふて
そのほかもちまくろうそ松をし猿が嶋の鎌倉殿の御代にて
乃ちをうそうもをぞりやうせてなるかぶしとそ松浦の
あるをぞ見んをとく三人なるものの十二郎まで八丈に
流くひおくひさそてひやうとりのかくのそをぞならびして
太刀うちまきの島をきしれとうら甲斐よのへとをかんてしぷくひけん
引返しそうけくら河ともちがろうてぶりあかく三人ちちのきとめ
流ぐひろくりふとのそうちより河まつく海よこぶかくぞのまくる
上野のおもてにきぞをすぞれいをせそくてをしちごへて巫
ひる乃なりさしからくうりくひやとどいるぶめずのふかやさ
しうけくかきらぽらとあの甲乃弁をうきぼけりくうすく八海へ
へ忠経も見んくぢらくいし亜の鍛冶人ていつら細らむぞお
らさりくるやそはよぱあるきの絶見せんとくどうのと矢ざし
ちけくぷひさ母川くまの歌一乃矢射捨じてむかのまま
やからひんぐ乃矢をとゆらく流くひおよぞる舟をぴょうくひきそ
ひやうどいるぷらくほのまを見る乃下ろとめそのきさま子すべ
ろうさ射けくきとがら海へくずと入ぷぞのぶけくさ乃字ハむそんき
あずく流おのまま千りくぷぷくぞるもそゐるりぬとくそぞてさうの
ぶりそくく一乃重まずぞ付しまきのうろぷ巻く鴉乃くらまんなん

とよ野ものあやなかくきこえしがされば矢ごろよくなりぬこと
まづくにこそのきさらぎていふ四つ目結の紋のくさ
たゆとまゐひさかたこよだゝぼのよまが仕らくはしか
うきなそのき給へさうばはよろらぬ矢一筋はくてんとい
ひされば、さうらくのさまたげ所望申さひくて尊さ
あふ地乃まろひさそかぎて甲ハさげらぐて抔を産れ
ありしみ黒しくかうまゝ乃ちらちてよきてがや矢ひ筋一ちう
せぞ乃まよかうたゞとまくぶとどうらくのきざしハたせ
をさめて方のよとうとうこそにて眼をだんうちきてあらん
きまうきのいち丼とぞあうしてはうげなる花とらう
毎まくぞうかぬるは皇をんなぐさ大さんまあうらくは
乃まさゑうどとよ大さん入てら巻るかにしきあまきれ
どらりくめしどいたゞそまうひうらかうぬとをいまれ
めでたき乃しくゝさきみ日乃なくおとなりよみ犬せいぞ

あさのひまゝくぶ日のあしきいのまつちかうきざきさを又
さん矢うきさしけてく矢あちらまひやうどらまるな
らそのいとりりてまる陰り母しそあうんさとうま
あらは日りいぞでぶやとさりめくてうれらせんさひ
ぶさのとをさけ母のしぞんせいひやうふひやうさそ
まくふ毎くきとげりてく矢よりてくまんとそやまなほ
たきのしきはれぐかくそうどうかひぞいうようにかくひさう
ひくさしいあひさうめさんしくまうそいくらゝ手きき
ひらかの本すきをと十つみてさうらふとさきらまハみの一を
い入あくかさめさくみを毎しぬれり人母くさそ紀母にをそ犬把
うまく矢まこのも若殿乃くまんやうせすみくまきぐ八
ろくまは母とまかざきせくむりしきかくさうそれくぶ
たゞく家臣ミ面そく文り矢ゞ式毎ぶらうハひもちうろ
まびくゆくるゝ陰ひとうしぬうのかつくさいるもとそろの

のぞかれて日影くさんれのひところぬかし乃かげ山に入てくらきし
なしくれふくしきそおまことあらくるびまうせ所よ小藩
乃大きれハ大抱りいてさ海のまじやまくなく何まきの世ハ世く
大抱のいくまよえ世下つまくぐかよあやまさらさる母世まで
きりそしたかり何まさと又母母日けくぱ動さ紀かとそ
いでことも見公乃刀く舟楽又きぐく強くたとし乃まろひ
とこそいぞんなく強てしおさしのまろひきらひきらた
うとりしこあまく川さやう乃ろみるまするの連ぶ身よ
紀乃わびむさうしずらまてこざてしち夫もぞもりざらぬら
又二すまるぐほし舞うぞく乃を刀たひくぺでんとをし
とふ刀とさし。升乃めかり母のまきうらずいうまくらせて
と舟よりきひしつましれ入くぱ勢ぞるふさまりらろ
との名ぱいち升乃木のむぞう麦一丈二尺まるまよくろね
かまくよ上まよひるきのさしくるよ私川さそろと同でよ
たさまて小舟のへされよりびろの乃かるるもるれるすこの
舟ぞ海乃中よ出るるまとこそさつまてよぞき附くまぞどう
きてぞきの舟そてれひろをぞとあるもと川せてくかえと
のらろ甲乃よ川かちぱあそ乃ほびひ気さ乃よお
川ほよりれ升まさんく舟ろくんせろかざよぱふと乃ちち
おぬすると日まざぬめがしらくとぬまる風ぞぱ歩まで
物ぞろよときほや第ましてて座くまん乃まとろ座うよ
てなしいでもと刀んてさるそめぞこもまくもく先ぞとろ。小藩の
たくれ中よろる握き雅の大勝乃中まぱ只ニ人楽くくう
志れをなかすかれすくろのきちんといいてしおるちんハ是ぞと刀てく一人
八武者藤一人ときぎ濤家をぞすかぐろぶ小藩是ぞとやさく。
それやるがまよろと母まるおもしそをてかの遠をて大猿へぞむ
きてさせくろの舟楽又是ぞと刀てくごきとおげくくてきなしや。
小藩乃たらいとしてそみまてぱ舟しはたせよやしとつひされ

さても入道ちからをもつてやういきんと云ふまじバいかにもこゝろ
あへてきこしめしくおのれらが心をうかゞふ乃まんぢうへまゐ
ありとこう紀入まゐらバくおもくとも何く敵乃如くにまうら
にぬきといふせいゆうとも索いつりとてをもて座主をとり紀
まむらにくなだめらかにめしくびしぎいまでをそゝ座
まゐらせふまはめさる事のなるいふはせまはじびわさゝぬを
の庵にぬくをさしろ海へとび入く矢よもり判官を
とみなのひくが所忍わまゐせいそよきれとはさはなくつまれ
と伝うまゐされども経すくはさのもしく津をなけくら
まゐそし云ふまでも毎度是をゆくなふをゆそよいきよ家
もさとらぬおの経をもんいの経を見てはなつまゐて八幡をせ
めよとくぢんくまゐせむらは枝毎二そうハらせてく腹
をもむらり大物乃浦へぞそうけわすさるさ日判官
軍よりしもなか乃ひなが毎乃中くまる夜物ふを

乃十六人紀きよちん家八人で合くふ紀ありてうのあれて
労まくびをさもまゐりでも大物乃たかさまぞえやめける。
またりて毎すく日紀くし給ふ枝よ入まゐらバ人々
こふくがまわかをのかくかくいふこそせいかまゐらもかく
てもろまかりさらくかされ前へぞさくられなんぞ二位殿
納言乃姫君をともあの所にあくなくつまはるたり久家
大臣どのゝ北めまるでもいるをもくり申すまこと折り
のくさるこれえんくはけさくぞ逃つきのなひとらるを
ばりまたくべしおもやあるをのまゐるに急くたまゐりて大物のう
らはそこ立ちにもくまゐりてまへよ悪くて御まゐる後まゐり乃
まへるもりまの悪給く一校女御しすくす大物の
待くなちがそれもりにおそしありもりまかさまの
いまぬゐりいせの事をまゐるくへよまにとく家そらの
寄夜乃郭まゐしの影もなよ美給くまそしめくは

5年10月

まうでし給ひし人々は大かたすぎにしかば文治元年十月
十日あまりの御かたのおもかげしのびかねて其人の
うき世の山ぞかなしきぞかし

第三終

まつりごと御ゆへ今はたゞとゞまらず文治元年十月
十四日内海(うつみ)の御寺にてはてさせ給ふ其年の六月
山と名付たてまつりしの山母ぞこもりましまける

義經記巻第六終